



TITLE:

大元ウルスの三大王国：カイシャンの の奪権とその前後(上)

AUTHOR(S):

杉山, 正明

CITATION:

杉山, 正明. 大元ウルスの三大王国：カイシャンの奪権とその前後(上).
京都大学文学部研究紀要 1995, 34: 92-150

ISSUE DATE:

1995-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/73071>

RIGHT:

大元ウルスの三大王国

——カイシャンの奪権とその前後——(上)

杉山正明

目次

はじめに

I クビライ以後の政治変動

(一) 大カアン権力空洞化への道

- (1) 英宗シディバラの暗殺
- (2) ひよわな大カアン成宗テムル
- (3) 武宗カイシャンの挫折

(二) ダギとその時代

- (1) 傀儡皇帝アユルバルワダ
- (2) コシラとシディバラ
- (3) テムデルとシディバラ

(三) なぜ泰定帝イスン・テムルか

- (1) 奇妙な即位の詔
- (2) イスン・テムルの立場

(以下、次号)

II 三大王国の経緯と組織

III カイシャンの奪権

はじめに

西暦13世紀のはじめ、内陸アジアのかたすみに出現したチンギス・カン

Činggis qan ひきいるモンゴルは、トルコ・モンゴル系の遊牧民たちをとりまとめ、「大モンゴル国」*Yeke mongγol ulus* と名づける牧民連合体をつくった。この新興の軍事集団は、つづく半世紀ほどのあいだに、ユーラシアの東西に急速に拡大した。世界の情勢は、一変した。

西暦1260年、すでにユーラシアのかなりの部分を領有し、「世界帝国」と呼んでもさしつかえない状態になっていたモンゴルの東西で、大きな変化がおこった。東では、この年に始まった4年間にわたる帝位継承戦争によって、クビライ Qubilai が勝利をおさめた。西では、大軍団をひきいて中東の東半をすでに席捲し、さらに西方への途上にあったフレグ Hülegü が、帝位争奪の発端となった兄の皇帝モンケ Möngke の急死の報をうけ、北シリアの最前線から旋回した。シリア、パレスティナ、エジプトはもとより、おそらくは西欧もまた、モンゴルの進攻をまぬがれた。

この結果、モンゴル帝国は大きく変貌をとげることとなった。フレグは、「イランの地」*Īrān-Zamīn* に西征軍を中心としてモンゴル政権のひとつフレグ・ウルス *Hülegü ulus* を樹立する。そして、クビライは当時の世界でもっともゆたかであった中国本土をもとりこんで、帝国東方に根拠をもつ「大元ウルス」（より正確には、大元大モンゴル国 *Dai-ön yeke mongγol ulus*）をつくりあげる。

ここに、モンゴル帝国は、大カアンのクビライが直接ひきいる大元ウルスを中心に、ロシアをふくむ西北ユーラシアのジョチ・ウルス *Joči ulus*、イラン方面のフレグ・ウルス、中央アジア方面のチャガタイ *Čayatai* 一門やオゴデイ *Ögödei* 系の諸派、さらには東北アジアの東方三王家など、いくつかの政権・分権勢力からなる多重複合の連合体となった。これを、一種の「世界連邦」と見ることもできる。モンゴルは急速に拡大の矛をおさめ、それにともなって、世界もまた、「モンゴルの恐怖」の時代から、多極化・安定化したモンゴルを中心に、人類史上かつてない世界規模の外交環境と国際通商の時代に移りゆくことになる。

さて、これまでこの大元ウルスについては、中華王朝のひとつ「元朝」とす

る立場から、おもに日本・中国を中心に、さまざまな研究が積みかさねられてきた。しかし、クビライとその血脈を皇帝としていただくこの政権は、たしかに一面で中華帝国の側面をもつものの、その本質はあくまでモンゴル国家にはかならなかった。従来、ややもすれば中華王朝のひとつとして見なしがちであったのは、ほとんど依拠する史料を漢文文献に限定していたためである。漢文史料は、この時代の研究にとってきわめて重要な史料源ではあるものの、モンゴル国家そのものについては、いくつかの特別な場合をのぞいて、たちいったことをしるすことがあまりできなかったという弱点をもつ。

モンゴルとその時代にかかわる文献は、20数ヶ国語にわたる。そのなかで、漢文文献とペルシア語文献が双壁の史料群であるが、両者の性格はことなり、モンゴルそのものについて知ろうとすると、ペルシア語史料の把握が不可欠である。モンゴルは、漢族にたいしては根本において距離をおいたが、逆にイラン系ムスリムにたいしては財務運営を中心に国家の機枢に参画させたからである。

クビライによってつくられた大元ウルスについても、イランの地でしるされたペルシア語の史料が、じつはしばしば有効となる。ペルシア語の文献が語る状況をつかんだうえで、個々の局面やことがらの細部にくわしい各種の漢文史料からの情報をかさねあわせてゆくと、より真実にちかい歴史像が浮かびあがってくる。もしくは、漢文史料のなかで、めずらしくモンゴル政権内部の事情に触れる記録がある場合、それをペルシア語史料が伝える大状況と照らしあわせながら分析・確認してゆくと、より真相が理解しやすくなる。

こうしたことは、大元ウルスを東方の中華帝国であると決めつけてしまいがちであった「通念」からすると、やや信じにくいことかもしれない。しかし、じつは「モンゴル時代」の東西文献は、ふつう予想されることよりもはるかに、おもいがけないほどの符合、一致、めぐりあいを見せてくれる。それは、大元ウルスが孤立した東方帝国でもなんでもなく、いくつかのモンゴル諸政権と密接な関係をたもちながら、それら全体のうえに立つ「大カアンのウルス」、すなわちいわばモンゴル世界帝国のなかの宗主国にはかならなかったからであ

る¹⁾。

本稿では、これまであまりにも中華の色彩をおびすぎたかたちで理解されてきたクビライ王朝の実態をさぐるねらいから、もっともその国家・政権の根幹をなすとおもわれるモンゴル国家としての権力の基礎構造とその変遷について、ささやかな試論を呈示したい²⁾。

検討にあたっては、対象とする時期を、クビライ時代から、その曾孫にあたる泰定帝イスン・テムル Yisün Temür の治世までに限定する。それは、この時期にクビライ王朝の基本骨格がさだまったうえで、その枠のなかで政局が変転しつつ、さらには骨格そのものも、しだいに変容してゆくからである。政治史上から眺めれば、ほぼひとつの時代と区切ってさしつかえない。1328年の「天暦の内乱」以後、1388年のクビライ王朝の断絶にいたるまでの60年は、大元ウルスの政治構造が根本から変化する³⁾。明朝との攻防もふくめ、東アジアから中央アジア、さらにはユーラシア全域にわたる歴史全体が変動する時期でもある。この時期については、別に論じる。

なお、本稿は全体を3つの部分にわけると。まずはじめに、本稿が扱う「三大王国制」が、大元ウルスの政治史の展開において、陰に陽に無視できない存在であったことを示すために、時代の順序は前後するが、「三大王国制」が成立したクビライ時代よりもあとの時期について、モンゴル中央政局の動向を中心に「三大王国」のゆくえのあらましを当時の政治概況と関連づけながら呈示する。それは、ひとつには、従来どういうわけか、研究上の関心や力点がクビライ時代に集中してそそがれがちであるあまり、逆に、クビライ没後の時期については、ごくあたりまえの政治史の枠組さえ、じつはあやふやなままにとどまって、しばしば事実と離れた論述もされているように見えるからでもある。したがって、ことがらの性格上、どうしても通史風の叙述にかたむく面もでてくるが、あえて筆者なりの理解の基本線を提出してみたい。なお、この時期の後半については、ペルシア語史料がとどきにくくなるため、依拠する文献の中心は漢文史料となる。

ついで、第二の部分において、その「三大王国」それぞれの成立の経緯とそ

これらの組織・構成・権能・領域などを、クビライ政権の出発期より、時間を追ってできるかぎり詳細に再構成する。そして、それら二つの部分を踏まえたうえで、「三大王国制」を基本とする大元ウルスの動向が、モンゴル帝国全体といかに深く密接にむすびついていたかをもっともよく示す事例として、中央アジアと大元ウルス中央をまきこんで壮大な規模でくりひろげられた1307年のカイシャン Qaišan による奪権をとりあげる。とくに、この前後の事情について、じつに詳細な情報をつたえるペルシア語の年代記『ヴァッサーフ史』*Ta'rih-i Vaṣṣāf* の記事を古写本にもとづいて校訂・翻訳・注解をほどこして紹介するとともに、関連する東方文献も可能なかぎりくわしく検索・照合・検討して、14世紀初頭におけるユーラシア東西にわたる歴史像を描いてみたい。

(今回は、第一部分のみを掲載し、のこりは次号とする。)

I クビライ以後の政治変動

(一) 大カアン権力空洞化への道

(1) 英宗シディバラの暗殺

至治三年(1323)八月癸亥、第9代のモンゴル大カアンで、クビライからかぞえては5代目となる大元ウルス皇帝シディバラ(碩徳八剌 *Sidibala*)は、御史大夫テクシ(鉄失、帖赤 *Tegsi*)以下の高級将官の策謀により、右丞相バイジュ(拜住 *Baiju*)とともに移動式天幕のなかで殺された。秋のおとづれとともに、夏期の都である上都から冬期の都の大都(現在の北京の直接の前身)へ南還する途上、南坡店という名の宿駅をかねる行營地に野営したときのことであった⁴⁾

ときに、シディバラは21歳。翌年二月にたてまつられた漢語による廟号は、英宗。同年四月のモンゴル語によるそれはゲゲーン(格堅、潔堅 *Gegegen* ~ *Gege'en* ~ *Gegen*⁵⁾)、すなわち「英明」。いずれにしても、剛明・睿敏であったとされるこの若い大カアンをしのばせる命名であった⁶⁾

シディバラは、絶大な権力者であった祖母のダギ(答己 *Dagi*)太皇太后が前年の至治二年(1322)年九月丙辰に⁷⁾そしてその寵臣で太師・右丞相とし

て中央政権を握っていたテムデル（鉄木迭児 *Temüder*）がその26日まえの八月庚寅に⁸⁾ あいついで他界した結果、ようやく自分の「新政」を本格化しようとした矢先に殺害されたのであった。実権を掌握してからはほぼ1年、通算でもわずか3年半にすぎない在位であった。密謀の中心人物であったばかりでなく、殺害の当の本人ともなったテクシは、一掃されつつあった旧テムデル与党のひとりであり、自分の生きのこりを賭けて、皇帝と右丞相をみずから手にかけたのである。

歴代のモンゴル皇帝の死因には、自然死は少なく、他殺を疑わせる場合のほうがむしろ多いが、それにしてもこれだけ歴然としたかたちで大カアンが殺されたのは、はじめてであった。史上、この事変のことを弑虐がおこなわれた駐蹕地の名をとって、ふつう「南坡の変」と呼ぶ⁹⁾

大元ウルスの政局は、いやおうなく、ここで大きく変化せざるをえなかった。1294年にクビライが長逝して以来、成宗テムル *Temür*、武宗カイシャン、そして仁宗アユルバルワダ *Ayurbarwada* の三代、およそ25年間、表面だけを見ると、大元ウルスの国運は申し分なく順調のようであった。中央アジアをおもな舞台とするモンゴル帝国内の紛争は消滅し、きわめてゆるやかながらも、モンゴル帝国全体は大元ウルスを中心に東は日本海から西はドナウ河口にいたる巨大な版図をひとつのものとする「連帯性」¹⁰⁾を回復していた。人類史上で最大の帝国が、それなりの安定を保って平和状態で落ち着いていたこと自体、驚異といえなくもなかった。

しかし、あくまでそれは表面だけのことにすぎなかった。ひと皮めくると、クビライ自身の強力きわまる指導力のもと、各種のブレイン集団を駆使して幾多の国家プロジェクトと新国家建設事業が推進された30年余の緊張と統制の時代をすぎて、クビライ王朝の中央権力そのものは、しだいに弛緩しはじめていた。モンゴル帝室・族長・集団・臣僚にたいする定例・臨時をとわぬ巨額の賜与をはじめ、各種の乱費がもたらす財政危機は慢性化していた。くわえて、あきらかに1310年代にはすでにはじまっていた「地球規模」の長期の異常気象と洪水・地震などの異様な天災の連続による不作・飢饉・流亡・暴動などが、

追いうちをかけていた。14世紀のユーラシア全域をおしつづんだ異様きわまる「大天災」は、どれほど重大視してもしすぎではない。大元ウルス政府当局にとって、最大の政治課題でありつづけ、これに苦しみぬくことになる。モンゴル帝国にかぎらず、14世紀のユーラシア各地における政治・社会変動の背景に、この巨大な自然災害のもつ意味は、もっと考慮されていいのではないかと考える¹¹⁾。

さらに、大元ウルスの政権内部に目をむけると、なによりも政局を混迷にむかわせたのは、いまや人類史上でおそらく最大の権力と富の所有者となってしまった大カアンの位をめぐる争いであった。それは、クビライ以後は事実上、その血脈のみに候補者が限定されることになったため、クビライの血をひく各王統のあいだに強いライヴァル意識をひきおこした。そして、それは、それぞれにつながりやかかわりをもつ他の帝室・諸侯をはじめ、集団と個人をとわず、さまざまなレベルで思惑と野望をもつ多くの人間をまきこまずにはおこななかった。

ここで、ごく簡単にクビライ諸系と「三大王国」を構成した血統について説明しておきたい。クビライと正后チャブイ Čabuiの間には、ドルジ Dorji, チンキム Činkim, マンガラ Mangyala, ノムガン Nomuyanの四人のむすこが生まれた。これらの嫡子のほか、他の后妃から七人の庶子が誕生したが、モンゴル皇族・貴族の通例にもれず、嫡庶の区別は厳重であった。

このうち、ドルジは早逝し、事実上で嫡長子となったチンキムが、まず燕王、ついで「皇太子」とされ、父クビライの膝もとにあたる華北一帯の庶政の責任者とされた。いっぽう、マンガラは安西王の称号をあたえられ、父の即位前の旧領であった陝西の京兆（現在の西安）を冬都、六盤山の開成を夏都に季節移動しながら、陝西・甘粛・四川・雲南・青海・ティベットの西面地域すべての統轄者となった（庶子の雲南王フゲチ Hügeči は雲南方面、おなじく西平王オクルクチ Oqruqči はティベット方面を担当したが、ともに大きくは安西王の統令下に属したと考えられる）。さらに、ノムガンは北平王（もしくは北安王）に封ぜられ、モンゴル本土とそこに展開する伝統の千戸群とチンギス以来のオールド

Ordo 群の長となった。それぞれの王権のしたには、担当地域に所領をかまえ権益を有する各種の帝室・諸王・貴族・軍閥などがくみこまれた。チンキム以下の三人の嫡子は、いわばクビライの分身であり、中・西・北の三つに分割された大地域と王権の上にクビライ自身が内蒙地区と大都周辺を「首都圏」にして君臨する体制となったのである。

本稿がいう「三大王国」とは、このチンキムの中央王国、マンガラの安西王国、そしてノムガンの北平王国をさす。このうち、ノムガンは嗣子なく他界したため、チンキムの嫡長子カマラ Kamala が晋王の称号をあたえられて、その遺鉢をついだ。晋は、もとより山西のことである。カマラ継襲にあたって、二字王号より一字王号に格あげされ、「北方」のモンゴリア王であることから、春秋時代の北方の覇者であった晋の雅名がとられたのである。これにともなって、マンガラの次子アルタン・ブカ Altan Buqa にも、一字王号の秦王があたえられた。秦は、やはり関中に根拠し、西方の覇者であることを含意する。ただし、マンガラ他界後、その王権は第三子のアーナンダ Ānanda が承襲し、かれは旧来の安西王を名乗るのを好んだので（次兄アルタン・ブカとその系統に秦王の称号だけを認めてまつりあげた、ともいえる）、こちらはもとの名のままであった。

これが、クビライ時代における大元ウルスの基本型であった。晩年のクビライは、孫たちがひきつぐ三大王国のうえに乗っていた。しかし、このクビライ嫡出の三大王家による分有支配体制は、クビライが大カアンのうちはよかったが、クビライが80歳というモンゴルとしては異様なほどの長命のすえについてみまかると、不安定にならざるをえなかった。いったい誰が、これら三大王国の統括者である大元ウルス皇帝となるか、ということである。その帝位は、全モンゴル諸政権にたいしても君臨する大カアンなのであった（以上の詳細は、Ⅱで扱う）。

モンゴル帝国において、大カアンという存在は、本来、チンギス一族を中心に結束する「モンゴル共同体」の安寧と富貴をもたらすものとして、それにもっともふさわしいとされた実力者がえられるはずであった。そうであるから

こそ、唯一絶対の権能があたえられた。あくまで、モンゴル全帝室が参加する総会議、すなわちクリルタイ *quriltai* における互選が原則であり、その原則はクビライ家が大カアンの位を独占することになったクビライ以後も、しだいに建前にはなりながらも、形式上では遵守されつづけた¹²⁾。モンゴル国家においては、帝国を小型にひきうつした各ウルスの場合でさえ、君主の交替は、たんに首長が別人にすげかわる程度のことではとうていなく、王朝が交替するといってもよいほどの激烈な体制と組織のくみかえをもたらした。まして、世界の帝王といってもいい大カアン位の争奪は、もはや帝位だけの問題にとどまるはずもなかった。

したがって当然のことながら、大カアンの他界にともなう帝位継承のふし目には、それなりの鬭争がおこり、それが二度・三度とくりかえされるうちに、帝権を主張するいくつかのクビライ王統とそれをいただく与党の色別は鮮明となった。相互のきしみや対立は、大カアン逝去という「異常時」ではなくても、現体制をくつがえして政権交替とそれによる自己の浮上をねらおうとするころみをつねに生みだした。そうすると、現に政権を保有する側も、たえず油断なく目をくばり、警戒をおこたらないようにする必要があった。「異常時」と「平常時」とにかかわらず、大カアン位をめぐる暗闘は、しだいに定常化した。しかも、それはときどきの帝位のゆくえやおりおりの「叛乱」の事後処理のしかたによっては、より大きなしこりと復讐心を、負の遺産として次世代の各王統・党派にのこしていった。その結果、あらたに政権を握った側による報復がそのたびごとにおこなわれ、その応酬がますます混迷に拍車をかけることになった。

英宗シディバラの暗殺は、クビライ没後の帝位をめぐる争いの第一の波が昂まった結果であった。成宗テムル以後の30年間にわたる政治史のひとつの帰結点でもあった。そして、より大きな変動を生む転回点ともなった。

(2) ひよわな大カアン成宗テムル

こうした事態をもたらしたひとつの重要な原因でもあり、そしてまた当然の

結果でもあったのは、大カアン権力そのものの空洞化であった。

たとえば、成宗テムルは、祖父クビライの後継者をきめるクリルタイの席上、雄弁さをもってもうひとりの有力な候補者であった実兄の晋王カマラを圧倒して帝位を手に入れたと、ラシード・アッディーン Rašīd al-Dīn の『集史』 *Ġāmi' al-Tavārih* は語る¹³⁾。テムルはクビライの最晩年に、亡父チンキムの所持した「皇太子の宝」の玉璽を授与されていたから、この時点では中央王国が北方王国の晋王家をおさえたかたちとなった。

しかし、そのおなじ『集史』が、大カアンとなってからのテムルは酒びたりで、出御のときには馬にもものれず、輿でゆくほど、心身ともに弱く病んでいたことを伝えている¹⁴⁾。なによりも個人としての有能さ、果敢さ、実行力がもめられるモンゴル大カアンとしては、考えられないことであった。

フレグ・ウルスの宰相でもあったラシード・アッディーンは、成宗テムルと完全同時代人であり、かれ自身の直接の主人であるフレグ・ウルス第七代君主ガザン *Ġāzān* < *Gazan* の命で『モンゴル史』（この部分を中核に、のち世界諸種族史をつけくわえて、『諸史を集めたもの』、すなわち『集史』となった¹⁵⁾）を国家編纂していたまさにその時の現モンゴル大カアンが成宗テムルであった。自分の主人の主人がテムルであった。あからさまな非難は当然ひかえるべきはずの当時において、こうした記事が平然としるされることは、よほど現職の大カアンであるテムルの軟弱ぶり、無能ぶりが帝国全土に知れわたっていて、もはや書いてもさしつかえないほどであったからだと考えざるをえない。

というのは、当時ペルシア語はモンゴル治下のユーラシアで、もっとも通用する国際語であったばかりでなく、大元ウルスの宮廷・政府の内外でもイラン系ムスリム臣僚はたくさんいた。それに、なによりも『集史』はその完成後、各地に送られたからである。つまり、モンゴル東方でも読めたし、見れた可能性が濃い。また、それを承知のうえで『集史』は編纂されたと考えていい。なお、こうした現権威者の実像にたいする率直な記述は、漢文の記録には、きわめてあらわれにくいものである。

成宗テムルは、その13年の治世のうち、前半の7年間は、亡父チンキムの正

妻で彼自身の実母であったココジン・カトン ĠT: *Kükġin hātūn* < *Kökejin qatun* (闊闊真。伯藍也怯赤 *Bairam Egeci* ともいう¹⁶⁾) の事実上の監督下にあった¹⁷⁾ 母の助言がなければ、重大事の決断はつかなかった¹⁸⁾ そのココジンが、大徳四年(1300)二月にみまかってからの後半の6年間にいたっては、病状がますます進行して政務をとることは、ほとんど不可能となった。このことは、漢文史料も明記する¹⁹⁾ そのため、一切の大権は、コンギラト族 Qonggirad 出身の正后が他界したのち筆頭皇后となっていたバヤウト族 Baya'ud のブルガン・カトン ĠT, TV: *Bülügān hātūn* < *Buluyan qatun* の手に帰した²⁰⁾ 成宗テムルが単独で国務を親裁した時期は、ほとんどなかったといっている。

ところが、かれの治世そのものは、じつは帝国は多事であった。その治世のはじめには、オデゴイ系の牧民英雄カイドゥ Qaidu が、その中央アジア王国ともいえる「カイドゥの国」 *mamlakat-i Qāidū'i* の総力をあげて大元ウルスとクビライ王朝の覇権に挑戦してきた。じつは、「通念」とはちがい、カイドゥはクビライにたいしては直接に歯むかおうとはしなかった²¹⁾ ところが、成宗テムルの登極となったとたん、態度を一変して攻勢をかけてきたのは、おそれていた帝王クビライがいなくなったというなによりもの理由のほか、その後継者となったテムルの力量不足を読んだうえで、あわよくばクビライ一代の産物である大元ウルスの崩壊を引きだせるかもしれないと判断したこともあったのだろう²²⁾ ところが、そのカイドゥのほうか、1301年の大会戦でうけた手傷がもとでみまかり²³⁾ その結果、「カイドゥの国」が瓦壊して東西和合がなったのは²⁴⁾ おもいがけない歴史の皮肉な産物なのであって、宮廷の奥深くにひきこもって伏せっていた成宗テムル自身の手腕によるものでは、もとよりない。

(3) 武宗カイシャンの挫折

大徳十一年(1307)正月、成宗テムルが42歳でついに病没したのち、壮大な規模で展開した一連の変転(これについては、Ⅲで詳述する。なお、このときの動乱の冒頭、安西王家の第二代アーナンダは、ブルガン・カトンとむすんで

帝位を手中にしたかに見えたが、アユルバルワダを擁立しようとするグループに倒された。このかぎりにおいて、二度つづけて中央王国のほうで、帝位の確保に成功したことになる) のすえに登極をはたした武宗カイシャンは、即位のとき、まだ27歳と若く、しかも実力で帝位をえただけに、叔父の先代皇帝テムルにくらべれば、はるかに行動力・実行力にとんではいた。にもかかわらず、結果として大アカン位の空洞化が、一層すすんだのはどうしてか。

カイシャンは、成宗テムル時代の大半を、アルタイ方面に展開する大元ウルス軍の総司令官として、最前線の軍営ですごした。成宗テムル政府は、モンゴリア王である晋王カマラだけではカイドゥ陣営の攻勢をささえきれないと見て、すでに逝去していた次兄ダルマバラ Darmabala の嫡長子である姪のカイシャンに中央軍団から精鋭部隊をさいてあたえ、おくりだしたのである。あきらかに、「厄介ばらい」を兼ねていた。

モンゴリア方面における対カイドゥ戦は、三大王国のうち、まず北方王国と中央王国のふたつをもってあたり、のち安西王国のアーナンダも戦陣にくわわる。アーナンダは、大元ウルス西面の甘粛・ウイグルスタン方面に当初は軍を展開させ、カイドゥ側の進行にそなえていたが、モンゴリア方面が主戦場となる形勢が判明すると、北へ安西王国軍の主力を転進させた。三大王国の総力をあげる布陣となった。

カイシャンは全軍の陣頭に立って、じつによく力戦奮闘した。モンゴリア担当でありながら、失敗をかさねた伯父カマラにたいし、カイドゥ軍とのモンゴルどうしによる史上最大規模の会戦に勝利をおさめる原動力となった。かれは、モンゴル本土と中央アジア方面の現実、遊牧生活と軍隊生活の苦楽には、よく通じていたと見ていい。

その10年ほどの駐留の間、ペルシア語の史料によれば、カイシャンは敵味方を問わず、愛されていたといわれる²⁵⁾ おそらく、若々しい武者ぶりと、かれ自身がよほど愛らしい性格のもちぬしであったのだろう。くわえて、わずか17歳で苦難の帝室内戦の最前線へ「飛ばされた」ことも、立場をこえた同情と憐憫を誘ったのかもしれない。

カイシャンは、カイドゥの没後、チャガタイ家のドゥア *Dū'ā* < *Du'ya* ~ *Du'a* ~ *Duwa* と組んで東西停戦を実現し、カイドゥ系の一門を追いおとしつつあった。²⁶⁾ ところが、いちばん東還していたアーナンダが、成宗他界という幸運をとらえて、中央権力を掌握しかけているとの報に、政権獲得をめざしてモンゴル高原を「大返し」した。そのときも、かれがいったん滞留した故都カラ・コルム *Qara-qorum* の陣営には、「諸王・勳戚，畢く会す」²⁷⁾といわれるほど、異常なまでに人気が高かった。その時点では、大都にはすでに、かれの実弟アユルバルワダをかつぐ政権が、いったん樹立されていたのだから、その人気はよほどのこととってよかった。

ただ、人柄や軍事上の才幹と、政治上の手腕とは別ものであった。おそらくは人の良かったカイシャンは、その人気に素直に一生懸命こたえようとしたためか、即位後、莫大な額の褒賞・賜与を全帝国にむけて乱発した。²⁸⁾ また、それまではクビライ嫡統の「三大王国」にしか認められていなかった一字王名の封号を、帝国内の主要な王家と姻族家に授与し、一挙に13もの最高待遇をうける家柄を出現させた。²⁹⁾ これは、その格式にともなう毎年の定例賜与の醸出を意味していたから、その財政負担は無視できない巨額とならざるをえなかった。

モンゴル帝国史上でおそらく最大規模となったカイシャン即位の彔飯振舞は、政権獲得の功労者たちばかりでなく、中央官庁づきの大勢の京朝官たちから、その身は広大な帝国各地の任地におりながら、中央政府の高官・高位を「遙授」されたものまで、おびただしい数の人間にゆきおよんだ。アルタイ方面の前線にとどまって、カイシャン不在の西部戦線を維持した武将たちは、いうまでもない。そのためこれ以後、本来は実職である丞相・平章のほか、もともと名誉称号にちかいはいえ、授与されること自体が稀有であるはずの開府儀同三司・司空・司徒・太尉・国公などの肩書をもつものが、とくにめずらしくなくなった。³⁰⁾

とりわけ、そのごの大元ウルスの歴史展開のうえで重大な意味をもったのは、このときカイシャンの直接の麾下にあったキプチャク *Qipčaq*, アス *Asu* ~ *Asud*, カンクリ *Qangli* などの軍事集団が大きく浮上したことである。かれら

は、クビライ時代に大カアンの直属軍団として編成されながらも、純モンゴル貴族たちからは、はるか下位におかれ、ときには蔑視されることすらあった。ところが、アルタイ戦線で苦楽をともにしたカイシャンをおしたててその即位を実現させた功績により、そのカイシャンの手で一気に純モンゴル伝統貴族たちと肩をならべる地位にまでひきあげられた。これをさかいに、かれらは政治の表舞台にたち、しだいに実権を掌握してゆくことになる³¹⁾

カイシャンは、また異様なほどの建設ずきであった。即位の翌月にあたる大徳十一年六月には、大都と上都のあいだに位置するオングチャドゥの地（旺兀察都，王忽察都。「船笈のあるところ」を意味するモンゴル語 *ongyūčadu*³²⁾ の音写）に中都と名づけるもうひとつの帝都を造営しようとしたり、大都城内にも母后ダギのための専用オールド兼宮殿群として興聖宮を建造するなど、各種の営繕事業をおこそうとした。その結果、即位にともなう桁はずれの莫大な下賜のため、ただでさえも逼迫していた中央財政は、危機に瀕することになった³³⁾

しかし、なによりもともかく、カイシャンは、わずか3年半の帝位で他界した。至大四年（1311）正月元旦、なんの前触れもなく突然に「不豫」となり、八日に大都城内の玉徳殿でみまかった。在位中のカイシャンは、腹心のカンクリ將軍アシャ・ブカ（阿沙不花 *Aša Buqa*）から、過度の飲酒と荒淫が健康をそこなうことを心配されるような生活ぶりではあったが³⁴⁾ それにしても不可解な点の多い不意の死であった。

この前後、カイシャンの実母であるダギ皇太后とその愛児でカイシャンの実弟でもあるアユルバルワダ皇太弟、およびその側近たちの動きは、微妙かつ不自然である。ただし、文献には、それとしてわかるようには明示されない。このすぐあと即位した仁宗アユルバルワダの時代には、それなりの人数の漢族文人官僚が登用され、モンゴル治下の「中国」ではめずらしく「文運」がさかんであったなどとしばしばいわれる。それらのものの幾人かは、かなりの分量の文章をのこしているが、カイシャン他界前後の事情となると、いずれも寡黙となり、直接の言及を避けている。その一方、ダギとアユルバルワダにたいする

かれらの手になる賛辞や美辞麗句は、一面で後世の人間や研究者の目を狂わす原因ともなっているが、もう一面では、逆に時の政権が覆いたかった事実がどのあたりにあるのか、結果として示しているように見える³⁵⁾

従来、カイシャンの治世については、負の評価がふつうである。それは、おおむね、次の仁宗アユルバルワダ時代を伝統中華王朝にちかい「良い時代」だとしてきた固定観念の裏返しである。しかし、カイシャンは、どんな政権構想をもっていたのか、はっきりと示す間もなく他界した。ただし、当時の純客観情勢から眺めて、少なくともひとつだけ見逃すことができないことがある。それは、クビライ時代以来、モンゴル帝国内の最大の懸案だった東西紛争を、最前線に立って終束させる当の本人となったカイシャン自身の登極によって、帝国全体がより強い再結束への可能性をほのみせていたことである。

モンゴル帝国の完全な統合をながらくはばんできたのは、ようするに、東西をつなぐ位置にある中央アジアが、チャガタイ家のアルグ Alyu の他界とバラク Baraq の抬頭以後、クビライ王朝を頂点とする帝国体制から離脱していたこと³⁶⁾ ところが、アルタイ方面に滞陣するカイシャンとむすぶことによって、宿願であったチャガタイ家の単独主権樹立への道が開かれたドゥア一門は、カイシャンを徳とし、その威令になびいた。

東西停戦がなった1303年の直後から、旧カイドゥ王国内での奪権闘争に転じていたドゥアとその諸子が、ほぼ中央アジア方面の牧民連合体の組みかえと再編をおわりかけていたちょうどそのとき、盟友のカイシャンがモンゴル大カアンとなった。これはまったくの偶然事ではあったが、ドゥア一門を盟主とするいわゆる「チャガタイ・ウルス」は、皇帝カイシャンの正式承認をえることで、名実ともに確立したといっている³⁷⁾ 直接には、カイドゥの子チャパル Čapar やグユク Güyüg の孫トクメ Tügme らオゴデイ諸裔の活動は、大カアン政府のドゥア家への肩入れによってとどめをさされた³⁸⁾

『元史』武宗本紀によれば、カイシャンは即位の翌年にあたる至大元年(1308)七月、その政権づくりがひととおりの済んだころ、帝国西方の三人の権力者、すなわちチャガタイ・ウルス当主のコンチェク Könčeg, ジョチ・ウル

ス当主のトクタ Toqto-ya~Toqto'a~Toqta, フレグ・ウルス当主のオルジェイトゥ Öljeitü にむけて, 正式な使者だけでもそれぞれ 9 人, 12 人, 20 人という使節団をあいついで送りだした³⁹⁾ モンゴルの習慣では, 通常, 使節は三人であるから, この場合はその随員までふくめて考えると, 大変な規模の派遣団となる⁴⁰⁾。それに, こうした大カアンの側からの遣使の記事が, ペルシア語史料はともかく, 漢文の『元史』にしるされること自体, めずらしいことである⁴¹⁾

あきらかに, 大カアンとなったカイシャンは, モンゴル帝国全体をにらんでいた。そして, ドゥアの子コンチェクにとっては, ジョチ家のトクタ, フレグ家のオルジェイトゥと同格の扱いをうけたことは, またとない政治上の効果となったことだろう。われわれがふつうにイメージする大カアンのウルスと他の西方の三ウルスというモンゴル帝国後半のかたちは, じつはこの代表使節団の派遣のさいに定まった。

こうしてみると, 放埒ともいえるカイシャンの金品・王爵・官職の乱発は, ふつうにはもちろん非難の対象でしかないが, 曾祖父クビライが夢みて果せなかった全モンゴル勢力の統合にむけての布石, もしくはその糸口としての融和策の面があったとすれば, 別の意味あいをおびてくる。

カイシャンは, 前述の使節団派遣と同時期に, 安南国・緬国へも遣使している⁴²⁾ 西方の三ウルスの場合とおなじく, おそらく陸路によるものであった。さらに, 翌至大二年 (1309) 九月には, 占八 (チャンパー Champā) をはじめとする「海外諸国」(東南アジア多島海域からインド洋方面の地域・港湾都市国家群) へも代表団を, こちらは海路で, 送りこんだ。それは, ウイグル出身でサンスクリト, ティベット語, ウイグル語, モンゴル語, 漢語などの諸言語に通じ, サンスクリト仏典・ティベット語仏典などの訳経事業にも活躍した文化・文教担当の有名なカルナダス (Karunadaz 迦魯納答思, 合魯納答思) らの奏請をうけたものだとされる⁴³⁾

東南アジアからインド洋方面については, すでにクビライ時代の末期に, 武力進攻による直接統治策から通商など経済を基軸とする関係樹立への転換がは

かられ、その結果、インド洋上ルートを使った「南回り」の東西交通と国際通商活動が、クビライ王朝とフレグ・ウルスのふたつの権威と庇護の連携のもとで、しだいに活性にむかいつつあった⁴⁴⁾。カルナダスは、その言語能力から、かってシンハラ・ドゥヴィーパ（星哈剌的威 *Simhala-dvīpa*）、現スリランカ以下の20余国が入朝したさい、上奏文の翻訳と通訳にあたり、クビライ政権の政策転換を演出した前歴をもっていた⁴⁵⁾。したがって、カルナダスを筆頭人とするこのたびの奏請は、クビライ時代に方向づけられた政経一致のかたちによる洋上ルート交易圏の掌握という方式について、あらためて新政権の注意を喚起し、その再確認をもとめるものであったと考えられる。

成宗テムル時代には、中央政権の目は、どうしても焦眉の問題であった中央アジア内戦のほうに集中しがちであった（クビライ没後も放棄されていなかった日本遠征計画が、ついに実現しない主因もこれである）。しかし、東西和合の実現により、陸路と海路の両方をつうじたユーラシア循環交通網は、いまや政治上、まったく障害がなくなっていた。大元ウルスを中心とする「モンゴル連邦」の主権のもと、世界は史上はじめて政治と経済の壁をもたない「新時代」へむかう可能性が開けつつあったのである。すくなくとも、カイシャンとその政府大官たちは、当時の大状況をそう認識していたとおもわれる。

おそらく、西方の三ウルスへの遣使と、これら東南アジア・南アジア方面への皇帝勅使の派遣とは、たがいに連動するものであった。ようするに、クビライ時代の30年間に計画され用意されてはいたものの、帝室内戦に足許をとられて十分な実現にはいたっていなかった「ユーラシア大交易圏構想」⁴⁶⁾が、カイシャン政権のもとで姿を見せはじめていたのである。

じつは、内政面においても、クビライ時代への回帰の姿勢は、はっきりと見られる。それは、親裁する大カアン自身を中心に、軍事と経済が一体化した国家運営の方式である。とりわけ、財務官僚群を主力とする中央政府の主導による経済優先型の側面がきわだつ。

カイシャンは、中国在来の行政・庶務・人事統制の中央機関である中書省と

並行して、経済専管のもうひとつの中央機関として尚書省を設置した⁴⁷⁾ この尚書省の職掌は、ごく単純に現在の日本国の場合に当てはめていえば、大蔵・通産・建設・農水・郵政・科学技術・経済企画・国税の各省庁をすべてとりまとめたものにほぼ相当する。従来の中華王朝には、こうした中央機構は存在せず、クビライが政権樹立ののち、はじめて設置した。おそらく、その発想は、イスラーム中東世界では当然であった財務庁 *dīwān* に由来する。ラシード・アッディーン『集史』以下のペルシア語史書も、そう表現する⁴⁸⁾

ただし、1260年代、クビライが中華帝国の官僚機構に形式上で範をとった政府組織を組みあげたとき、中国方面にはそうした概念・用語ともに見あたらなかった。そこでやむなく、古くからあった中書省・尚書省のうち、すでにモンゴルがオゴデイ時代に中央書記局・文書局の中国むけ名称として使っていた「中書省」を中国在来型の中央行政機関のほうにふりあて、かたやアラビア語・ペルシア語の「ディーワーン」と対応して徐々に使用が普及していた「尚書省」を経済機関のほうに当てはめて、それぞれ慣例を追認するかたちで、あらためて正式名称とした。その経済部門の総合官庁である尚書省を、カイシャンは即位3年目の至大二年（1309）八月に、新政の中心機関として復活させた。クビライ時代の至元二八年（1291）以来、18年ぶりのことであった。そして、在来の中書省のほうについては、実権のほとんどない形式だけの存在としたのである⁴⁹⁾

また、貨幣政策においても、同年九月、カイシャンはクビライ時代の中統鈔・至元鈔のうえに、23年ぶりに至大銀鈔という新紙幣を発行した⁵⁰⁾ モンゴルは、超広域の帝国全土にわたる共通の価値基準として銀を基幹通貨とみなし、徴税・財務・交易・下賜など、あらゆる経済行為を銀、ないしは銀だてでおこなっていた。ただ、肝心の銀そのものが、当時のユーラシア・アフリカにおいては、モンゴル世界帝国の政治・経済政策のもとで急速に膨脹しつつける通貨需要をまかないきれだけの絶対量をもたなかった。銀と連動する紙幣は、その代替物のひとつであったが、このころ「鈔法大壊」、すなわち紙幣制度は壊滅していたといわれる⁵¹⁾ カイシャンは、新設の尚書省のもとで、紙幣システ

ムを再建させようとしたのである。

カイシャンはまた、モンゴルとしてははじめて銅銭の鑄造にも踏みきった(ただし、かれの政権があまりにも短期であったため、実質上、記念コイン程度の意味にとどまらざるをえなかった)。尚書省を新政の中核機関にすえたカイシャン政府は、この新鑄銅銭と歴代銅銭との交用を認めたことからわかるように、⁵²⁾ 交鈔・塩引・金・銅銭など利用可能な各種の「補助貨幣」の併用をつうじて、銀を中心とする通貨体制をなんとか維持・管理しようとしたのだと考えられる。その背景には、カイシャン即位にともなう「バラマキ」政策の結果としての財政危機はもとよりのこと、そもそもあいつぐ内戦の戦費支出による財政負担にもかかわらず、財政上も制度上も、クビライ時代の遺産を食いつぶすままで、無理のない新財源の創出や信用下落のつづく交鈔制度のたてなおしなどに、さしたる対策や努力をはらったようには見えない成宗テムル時代の政権体質が無視できない。

この点、従来ややもすれば、農を本とし、商(この場合、単なる商業だけでなく、商品生産や流通、さらに金融もふくまれる)を末とする中華文明の建前論をことさらにふりかざして非難する当時の漢文文献をそのままうけいれて、カイシャン政府がおこなおうとした通貨管理・経済政策を頭から否定してとらえがちであったことはいなめない。しかし、後述するように、仁宗アユルバルワダ時代にしるされた漢文文献の多くは、前代を否定したい政治上の要請にこたえた産物であった。ところが、巨細に調べると、一見そうした記録ばかりに見える当時であっても、ただやみくもにカイシャン時代の通貨政策を廃止すれば済むとするアユルバルワダ政府首脳部にたいして異論をとるものも、じつは複数いたことがわかる。⁵³⁾

とにかく、カイシャンが即位後、とりわけその政権の足もとが定まったかには見えた2・3年目に、矢つぎばやに発表しはじめていた一連の経済主導型の政策大綱は、多くの点でクビライ時代をひきうつし、その再現をつよく意識したものであったといえることができる。

もともと、こうした国家・政権が先頭に立って誘導する商業重視・自由経

済・通商振興政策は、近代西欧における国家と資本主義のありかたに先行するものとして、世界史上、きわめて注目に値するものである。もとより、歴代の大元皇帝の政策は、そのときどきに多少の色合いを異にすることはあったが、大局から見れば、経済重視の姿勢は一種の国策として大元ウルスという巨大国家の体質にちかいものであったといえることができる。ところが、そこで注意しなければならないのは、現代のわれわれの目からは、むしろ当然と見えるこれらの諸施策が、当時の中国本土における漢文化人には不評判であったことである。

それは、おもに、よって立つ価値観・文明観のちがいによる。理念上、古代社会に理想王朝を設定し、発想・表現ともに、農本主義・自然経済・原理主義の建前の束縛から、どうしても自由にはなりきれないふつうの中国読書人・知識人たちにとって、モンゴル政権、とりわけ1260年以後のクビライ王朝において顕著にみられる重商主義にきわめて類似する国家運営は、歓迎されるはずはなかった。そうした意識や拒否の感情が、カイシャン時代など、経済重視の姿勢がふつう以上にはっきりと標榜された時期については、文献上の集中非難となって極端なまでにあらわれがちとなる。それは、元代漢籍を扱うさいに配慮しなければならない留意点のひとつである。

ひるがえって、カイシャンによるもうひとつの帝都「中都」の造営についても、従来はやはり不評判であるが、それがクビライによる大都と上都の建設を意識したものであったことは疑いない。カイシャンは政権を獲得するうえでポイントとなったカラ・コルムでの即位をのぞまず、わざわざ上都に帝室・諸將の来会をもとめてクリルタイを開催し、そこでの議決をうけたかたちをとって即位式を挙行了⁵⁴⁾。50年ちかくまえの1260年、その3年後には上都と命名された開平府で即位式をあげたクビライをあきらかに意識していた。

とはいえ、もちろん、一にも二にもクビライ方式に準拠するかに見えるカイシャンの新方針が、はたして当時の現実のなかで、どの程度に実現可能で妥当なものであったかは、さだかでない。少なくとも、成宗テムル時代の帝室内戦による龐大な出費をしのいだばかりで、一息つきかけていた大元ウルス中央政

府の要人・高官たちにとっては、財政負担を顧慮しているとはおもえないカイシャンのやみくもな膨脹主義・拡大路線は、歓迎できる筋合いのものではなかったはずである。カイシャンは、そうした内心の反対派たちもあえて肅清せず、新政権のなかにとりこんでいた⁵⁵⁾ 一面でかれの「協調路線」「融和政策」の賜物であり、一面でかれの気の弱さ、人の良さの結果であった。しかし、カイシャンの突然の他界の背景には、成宗テムル時代のままに中央政府のなかにとどまることができた大官・要人たちの不安や思惑も、無視することはできない⁵⁶⁾

とはいえ、ともかくよくもわるくも実力のある大カアンであることはまちがいなく、くわえて強烈な方向を帝国内外に打ち出しつつあった武宗カイシャンが、おもいきった新政を開始してそうそうに、混乱だけをのこして消えさってしまったことは、かれの存在が当時の政局全体に占めていた意味あいが大きかっただけに、よけい大きな反作用を生むことになった。

これをさかいに、大カアン自身の無力化は、逆に否定しがたい趨勢となった。大カアンという地位に賦与される巨大な権能と責務に押しつぶされることなく、それを駆使して全モンゴル規模での期待にこたえようとする大カアンは、もはやこれ以後あらわれない。

(二) ダギとその時代

(1) 傀儡皇帝アユルバルワダ

カイシャンのあとをついだ仁宗アユルバルワダは、母后ダギの傀儡にすぎなかった。むしろ現実からいえば、カイシャン逝去の日から英宗シディバラ暗殺の前年まで、前後およそ12年間、女性ダギの専権時代がつづくこととなった。この「ダギ時代」、中央政権は極度に内向化し、「三大王国」は後景におしやられるかたちとなる。成宗テムル時代に見えだした大カアン権力の空洞化は、仁宗アユルバルワダ時代にいたって、なまじ大カアン本人は健康体である分だけ、誰の目にもおおいがたく歴然たるものに映ったと考えられる。

もともと、ダギは、成宗テムル没後の政治変動のなかで、自分とともに亡夫の旧領であった懐孟の所領（河南省の黄河北岸一帯。渡河点として名高い孟津

とその周辺。もともと、モンケ時代のクビライ私領にさかのぼり、チンキムとその系統に継承された投下領)に就封していた愛児アユルバルワダをおしたてて、いったんは大都での宮廷内闘争に勝利をおさめ、政権を握った。ところが、もうひとりの子であるカイシャンが、中央アジア戦線から反転してきたため、その軍事力に屈伏を余儀なくされた。まれに見る気丈な女性のうえ、どうやら偏愛の程度もふつうでなかったらしいダギ⁵⁷⁾は不満がおさまらず、一面で気弱なところのあったカイシャンが母の懇願に抗しがたいのを見抜いて、かれに無理じいして、その亡きあとは弟を、という約束を承諾させ、「弟の皇太子」という奇妙な地位をつくりださせていた⁵⁸⁾。

カイシャンには、長子コシラ Qoşila、次子トク・テムル Toq Temür と、ふたりの男児がちゃんといたから、まことに不自然でおかしな措置であった。これが、より大きな党争と紛乱をまねく原因となる。ともかく、その結果、漢文史料の表現にしたがえば、カイシャン時代は、その一面において、皇帝カイシャン、皇太后ダギ、そして皇太弟アユルバルワダの「三宮」が鼎立するかたちとなっていた⁵⁹⁾。首都の大都城内で冬営する時期ならば、ちょうど、宮城の中央にひろがる太液池の巨大な湖面をはさんで、その東側の大内にカイシャン、西側のチンキム以来の皇太子府である隆福宮にアユルバルワダ、さらにその北側に新設されつつあった興聖宮にダギという三人の立場と関係を見事にシンボライズした三つの宮殿群が鼎立した⁶⁰⁾。おそらく、興聖宮の造営そのものが、その意をふくんだうえで、ダギをなだめるための措置であった。ここが、以後ダギの牙城となった。こうした一連のことがら全体が、カイシャン奪権のさいの妥協の産物であったことはあきらかである。

母が敷いてくれた路線のままに、「予定どおり」大カアンとなったアユルバルワダとその治世については、これまで不思議なほど評価が高い。その理由としてふつう挙げられているのは、かれが中国文化に理解や識見があり、儒学を尊重し、兄の放漫財政をたてなおしたなどの点である。たとえ皇帝だからといっても、しょせん個人の性向や趣味にすぎないことが、はたしてどの程度まで世界の帝王であったモンゴル大カアンの政治評価とむすびつくものかどうか、

根本からの疑問はさておくとしても、そもそもかれの「美点」とされた諸点そのものが、きわめてうたがわしい。

アユルバルワダ自身は、漢語も漢文もみずからは解せず（もとより、モンゴル皇帝にその必要はない。それは、大カアンとしての優劣とは関係ない。漢語・漢文を知らなくても、たとえばモンケのように数ヶ国語を自在にこなしユークリッド幾何学にも通じた無類の知識人の大カアンもいたし、元代漢文文献で無条件に賛美されるクビライも、すくなくとも漢文は解さない）、ただモンゴル語に抄訳された漢文典籍の「さわり」を朗読させてよろこんでいたにすぎない⁶¹⁾ 儒学尊重も、成宗テムル以来の既定の路線を踏襲しただけのことで、政治上・文化史上の意義でいえば、武宗カイシャンによる孔子にたいする加封の詔と中国全土にわたるその刻石の立碑のほうがはるかに大きい⁶²⁾ 財政再建も、後述するように擬態にすぎず、実際には中央財政はより悪化したとみられる。

率直に言って、アユルバルワダにたいする高評価は、ほとんど誤解である。それは、漢文文献の字句の表面に眩惑されている面が否定しがたい。「漢法」、すなわち伝統中華王朝風の政策のポーズや、それをことさらに意識した文字表現に遭遇すると、歴史上の現実とはひとまず別に、ともかくもまずは評価したくなる研究者心理は、客観性を欠き、いささか素朴すぎる態度といわざるをえない。

実際には、家庭教師役であった李孟のすすめで、わずかばかりの漢族士大夫をおもにサロン文化用の宮廷官僚に「登用」したことで、ささやかな規模にすぎなかったが中国読書人・士大夫たちが熱望した科挙を再開したことのふたつの理由で、そういわれているといっても過言でない。ところが、その李孟も、地方胥吏層の出身で官歴はなく、懐孟流寓時代のダギにたまたま気に入られてアユルバルワダにつけられたことが唯一の縁でのしあがった幸運児にすぎない。その人品も、どうやら下劣であったらしく、さかんに儒者を気取って得意がった。科挙の復活といっても、その首唱者にして第一回目の貢挙と廷試の長官になりたいという彼の出身ならではの屈折した心理と名誉欲の産物であった⁶³⁾

現実のアユルバルワダは、おとなしいことだけが長所のような人間であった。かれ個人は、それなりに理解力もあり、嫉妬心や計算高さも人並みにそなえていたが、とくに大カアンとなってからは、覇気がほとんど消えうせ、なにごとにも意欲がなく、諸事ものぐさで、周囲の人間のいいなりになった。とくに、母親のダギには、まったく頭があがらず、彼女の意向ばかりを気にしていた⁶⁴⁾ その意味では、たしかに「天性慈孝」ではあったが⁶⁵⁾ 肝心の母后ダギとその取りまきたちが全く無定見で復讐心ばかりが旺盛であった⁶⁶⁾

したがって、そのものたちのままに動いた仁宗アユルバルワダの治世は、よくもわるくも、かれ自身のささやかな個性とは、本来かかわりないところで展開した。かれの治世を評するには、皇太后ダギと太師・右丞相テムデル以下の面々を対象にしなければ、あまり意味をもたない⁶⁷⁾ 仁宗アユルバルワダに限っていえば、クビライ王朝における大カアンという地位の機関化、シンボル化を促進したことに歴史上の最大の意味がある人物といわざるをえない。それに、そもそも北宋の仁宗の例からもわかるように、仁宗という中国式の廟号は、天子であったこと以外に特徴にとほしい人間であったことを暗に示す辛辣な底意を秘めた命名ではなかろうか。

アユルバルワダの即位は、少なくとも表面を見るかぎりでは、兄カイシャンの場合のような動乱のはてによるものではなく、先帝他界にともなう「皇太子」の即位という自然で平和裡のおだやかな継承であったはずである。ところが、すこし立ち入って考えてみると、じつはまれに見る血ぬられた惨酷な即位であった。従来、そのことにほとんど注意しないのは、不思議である。アユルバルワダが、おもてむきは別として、実際には、あまりにも政務に熱心でなく、年とともに精神も病んでいったかに見えるのは、即位にまつわる陰惨さも、ひとつにはその原因となり、生来きわめて繊細であったらしいかれの神経が、より圧迫されたためかもしれない。

皇帝アユルバルワダにとって、不利なことはまずしるされないと見てさしつかえない『元史』仁宗本紀の公式記事⁶⁸⁾を、そのままなぞってみるだけでも、

かれの即位がどんなものであったか、事態の一端は浮かびあがってくる。

まず、武宗カイシャンが息をひきとってからわずか2日後の至大四年(1311)正月壬午(10日)、カイシャンが設置していた総合経済官庁の尚書省が廃止された。しかも、尚書右丞相、すなわち政府首班であるトクタ(脱虎脱。TV: TĠTAY / Tuġtāi < Toqta. 『ヴァッサーフ史』によれば、かれは女真族である⁶⁹⁾)をはじめ、主要な宰臣のほとんどが拘禁された。ついで、その四日後の丙戌(14日)、左丞のモンケ・テムル(忙哥帖木兒 *Möngke Temür*) ただひとりが海南島へ流罪となったのをのぞいて、のこるトクタ以下、尚書左丞相のサンバオヌ(三宝奴。TV: SNBNW / Sanbunū < Sanbaonu. 『ヴァッサーフ史』ではウイグル族⁷⁰⁾)、平章政事の楽実、右丞の保八、参政の王罷は、ことごとく処刑されてしまった。

かれらの拘禁の理由は、「旧章を変乱し、百姓に流毒」したとのことであったが、もとの制度をかえたのはカイシャン自身であり、民衆に迷惑をかけたことだけで政府首脳が死をもって責任を問われるならば、モンゴル時代にかぎらず、どの時代でもきりが無い。ようするに、理由らしい理由はなかったのである。カイシャン政府の中樞は、先帝の政治に参預したというただそれだけの理由で、カイシャンがみまかってより6日にして壊滅した。モンゴル国家はじまって以来の異常事態となった⁷¹⁾

そればかりではなかった。さらに、壬辰(20日)には、カイシャンが推進していた中都の築造がとりやめとなり、同時に旧南宋国の降将であった程鵬飛をはじめとする14人の漢族士大夫と、モンゴル族のドルベン Dörben 出身で漢風の姓名をなせる老将の郝天挺⁷²⁾、そして杭州路ダルガチのアフマド(阿合馬 *Aḥmad*) の、合計16人を「同じく庶務を議す」、すなわちブレインとして招聘することが発表された。そして、その2日後の甲午(22日)、処刑されたトクタらに「阿附」した「左右司・六部の官の罪を宥す」という奇妙な措置がなされたうえで、さらに3日後の丁酉(25日)にはテムデルが中書右丞相、オルジェイ(完沢 *Öljei*) と李孟が中書平章政事に任命され、事実上において、新政権が発足されてしまった⁷³⁾。ようするに、カイシャンの「不豫」から一ヶ月も

たらず、新帝即位もまだおこなわれないうちに、大元ウルスの中央政府は一変したのである。

これでは、まったくクー・デタである。モンゴル帝国の歴史上、前政権の首脳部がほとんど処刑ないし粛清されたのは、モンケによる旧グユク派の弾圧、クビライによる旧アリク・ブケ Ariq Böke 派の処分以来のことである。しかし、それぞれ3年と5年にわたる双方が生死をかけた対立もしくは内戦のあげくのことであった。平和裡の政権交替でありながら強行された仁宗即位の場合とはわけがちがう。カイシャン即位のときは、自分が直接にはかかわらなかった大都における宮廷内闘争において、敗者となった直接の当事者のみを処刑したにすぎない。しかも、その処分そのものは、アユルバルワダをかつぐ大都臨時政府が、すでに決定していたものであった。⁷⁴⁾ 先帝崩御後、わずか6日後における政府首脳部の抹殺という異様さは、モンゴル帝国史上できわだっている。

それに、処刑後の措置も、ふつうでない。粛清されたトクタらに中央政府の官僚たちが「阿附」したというのも奇怪なはなしである。トクタらはカイシャン政権の中枢機関である尚書省の責任者であったのだから、政府官僚がその指令にしたがうのは当然である。⁷⁵⁾ それをあたかも私党の結託のように、ことさらにいいたてたのは、それが理屈にもならない無茶ないいがかりであるのはおそらく承知のうえで、クー・デタまがいの政変に反対するものを威嚇し、新政権への協力を強要するためだったのだろう。じつは、はじめは政府官僚を大量処刑するつもりだったけれども、楊ドルジ（朶兒只 Dorji）に諫言されて首脳部だけにおもいとどまったという記録もある。楊ドルジは、アユルバルワダ側近であるから、事態は深刻である。⁷⁶⁾

まして、その同じ日に発表された程鵬飛以下の「登用」は、既存の政府官僚たちへの牽制であるとともに、新政権の出発にあたっての一種の擬態にすぎなかったと考えられる。というのは、このときの合計16人のほとんどは、もはやブレインとしても無理な高齢者か、さもなくばまったくただの文人としかいいようのない面々であった。⁷⁷⁾ つまり、政治上でいえば存在することだけが意味のある「飾り」にすぎなかった。これをもって、漢族官僚の重用などというの

はおかしい。

こうしたあざといまでによく出来すぎた事態のはこびかたは、この政変が周到にねられた計画性の高いものであったこと、そして不自然な威嚇や装飾をしないではいられないほど、当事者たちにとっても、よほどうしろぐらい面のある政変劇であったことをうかがわせずにはおかない。

とはいえ、なににもまして肝心なことは、次の大カアンもきまっていない時点で、この異常なまでに激しい政権交替は、いったい誰の命令・権限でなされたのか、という点である。というのは、中華王朝ならともかく、モンゴル帝国では、「皇太子」は、しょせん真の皇太子ではなかった。あくまで、大カアンは帝室総会議での互選でえられなければならなかった。いいかえれば、先代の大カアンが、その生前に誰かを後継者に指名していようがまいが、それは関係ない。

このときまでのモンゴル帝国において、漢文で「皇太子」、アラビア語-ペルシア語で *valī al-'ahd*, *valī-'ahd*, *vilāyat-'ahd*（「統治の代理者」の意）とされた人物が⁷⁸⁾ そのまま大カアンとなった例は、クビライ末年に「皇太子の宝」をさずけられていた孫の成宗テムルただひとりしかいない⁷⁹⁾。まして、「皇太子」とされていた人物が、大カアン空位の間、政務を代行するなど、じつは皆無なのである。

つまり、カイシャン没後のこの場合でいうならば、アユルバルワダが「皇太子」だからといって、かれは政府首脳部を入れかえたり、さらには処刑したりするなど、なんの権限もないのである。もし、これがかれの名でなされたとするならば、アユルバルワダはクリルタイを無視したことになり、全モンゴルから否定されることになる。この点、中国風の観念を当然の前提として、この間の一連の政治経緯を眺めようとすると、甚大なあやまりを創作してしまうことになる。そして、これまでやや、このときの漢文文献が中華風の価値観でつづっている一見あたりまえの、そのじつ重大な陥穽を秘めた記述を、そっくり字句どおり素朴な感覚のままにうけとって、歴史を再構成しがちであったことは否定できない。

通常、大カアンの没後、新帝選出までの間、庶務をとりさばくのは、他界した先帝のカトン、ないしそれに準じる人物、すなわち女性なのである。この場合は、カイシャンの正后チンゲ（真哥 Čingē）が在世していたのだから、順当ならば彼女がその任にあたるのがふつうである⁸⁰⁾。しかし、実際には、この政変は皇太后ダギがおこない、アユルバルワダも決して無縁ではなかった⁸¹⁾。どちらも、越権行為であった。

アユルバルワダ政権では、カイシャン時代のあらゆる新施策が、大小となく、ほとんどすべてくつがえされ、禁止されている。その異常さは、これまでしばしばいわれたようなモンゴル本土重視と中国重心主義の路線の対立などという種類のものではなく、感情が先に立った意趣がえしを感じざるをえない⁸²⁾。

実権者となったダギは、五台山信仰に熱中して巨費を使い、テムデルは大カアンであれば周囲に配慮してむしろできないほどの弾圧や強権を執行した⁸³⁾。皇帝アユルバルワダは、なき実兄の幻影におびえていたのか、皇太子府にこもったまま、なかなか大内に入ろうとはしなかった。これには、かれの儒者ごのみで「登用」された漢族文人官僚たちも困りはて、出御を乞う上奏文をしたためて、現実の姿を後世に伝えてしまった⁸⁴⁾。

アユルバルワダは、母后ダギをはじめ、当時のクビライ帝室の多くが尊崇・熱中したティベト仏教に人一倍、感溺した⁸⁵⁾。ふつうなら、儒者官僚たちはこうしたことを口をきわめてののしるはずのところだが、それを黙過したうえで儒学への「傾倒」だけを賛美した。前政権への非難とは裏腹に、官爵の乱授は「笑いを将来に貽す」と心配されるほど激しかった⁸⁶⁾。アユルバルワダ政権という名のダギ-テムデル政権を打倒しようとする計画や叛乱は、仁宗の異母兄アムガ Amuqa の篡奪未遂事件をはじめ、しきりにおこった。モンゴル帝国全体は、カイシャン時代の遺産で東西の遣使往来など、当初それなりの交流はつづいたが、エセン・ブカ（*Īsān Būqā* > *Esen Buqa*. 也先不花）を当主とするチャガタイ・ウルスとは、首脳交渉で済む程度の問題を、仁宗政府が当事者能力を欠いたため、深刻な軍事衝突をひきおこし、より緊密なモンゴル統合体へ復

帰・発展する芽はしぼんでいった⁸⁷⁾

仁宗時代の漢文史料は、カイシャン時代の放漫財政を好んで攻撃したがらる。しかし、ダギとテムデルの放恣と乱費のほうが時間が長い分だけ、おそらく一層ひどい打撃となった。財政再建に苦慮・格闘する仁宗政権という既製のイメージは、根本において矛盾がある。財務担当者がどんなに緊縮財政を訴えても、政権中枢そのものが甚大な浪費をして懲りなかったからである。すでに幾度か言及した漢族官僚の「登用」というもうひとつのイメージも、じつはテムデル以下の主要宰臣のほとんどは、その他の時期と変わることなく、モンゴル、ウイグル、ムスリムなどで占められているという単純な事実を忘れている⁸⁸⁾

仁宗期、さらにひきつづく英宗期については、ペルシア語の史料はアユルバルワダの即位の様態を伝える『ヴァッサーフ史』の記述を最後に届かなくなるものの⁸⁹⁾ 漢文文献のほうは各種の文集のほか、『大元通制』の一部分を伝える『通制条格』や元刊本のままに利用できる『元典章』など、この時期に編纂された政書類もあり、研究をすすめる史料上の条件は悪くない。ただし、それだけにこの時期の漢文文献は、通常以上に同時代の政権についてことさらに賛美しがちで、それ以前の事柄については、逆に、しばしば否定・非難の方向で言及されやすい政治構造が背景にあることに留意する必要がある。『元典章』でさえ、そうである。

政権そのものでいえば、むしろ仁宗期は、全モンゴル時代を通じて屈指の無統制・無秩序・無責任で不安定なときであった。モンゴル帝国全体から見ても、また大元ウルスの枠内に限っても、モンゴル支配をその内側からつきくずす要因の多くは、このときに目に見えて醸成されたといっている。そうであったからこそ、17歳で無能・無為の父のあとをついだ英宗シディバラは、大カアン権力の回復と弊政一新に勇みすぎるあまり、足もとをすくわれ、墓穴を掘ることにもなるのである。

(2) コシラとシディバラ

大アカン権力の空洞化、ダギ政権の内向化をさらに決定づける事態が出現す

る。それは、のちの英宗となるシディバラの立太子にまつわる一連の「政変」である。

仁宗の治世六年目にあたる延祐三年（1316）十二月丁亥、仁宗の嫡子シディバラは皇太子に立てられ、チンキム以来の慣例にしたがって、中書令、枢密使を兼ねるかたちとなった。翌年の閏正月丙戌には、「建儲の詔」がわざわざ発せられ、その旨があらためて内外に布告された⁹⁰⁾

すべてはダギの意向ではあったものの、この時期にあえてそうしなければならぬことさらな事情と理由があった。関係の漢文史料は、一見、錯乱しているかにみえる。

皇太子の有力候補者は、なきカイシャンの嫡長子コシラと仁宗の子シディバラであった。延祐三年十二月の時点でいうならば、大徳四年（1300）十一月壬子の生まれのコシラは数え年18歳、大徳七年（1303）二月甲子の生まれのシディバラは14歳である。ともに、ダギにとっては孫にあたる。

まず、興味深いのは、『元史』巻116、后妃伝の答己伝である。それによれば、ダギはコシラが幼いときより英気があるのにたいして、シディバラはやや柔懦であるのを目にしていた。そのうえ、「諸もろの羣小」、すなわち取りまきたちがコシラを立てるとダギに不利であるとしたので、ダギはシディバラの擁立をきめた。ところが、のちシディバラが即位し、いまや太皇太后となったダギがやってきて祝賀すると、英宗はうって変わって毅然たるところが顔にみなぎっていた。ダギは、「この児を養うつもりではなかった」と後悔したが、いまさらどうすることもできず、それを恨みにおもって病いを発し、そののち崩御するもとなつたという⁹¹⁾

個人の文集など、いわば私撰の記録にはかえって見えないめずらしい記事である。いっぽう、実権者の祖母を騙したかたちとなったシディバラの治世をしるす英宗本紀の冒頭には、この立太子問題にかかわって、次のような記事がのる。

仁宗、立てて太子と為さんと欲す。帝（シディバラのこと）、太后に入謁して固辞して曰く、「臣は幼くして能なし。且つ兄の在る有り。宜しく兄

を立て臣を以て之に輔せしむべし」と。太后許さず。

やはり、私撰の文章には見えない記録である。これによれば、この立太子をめぐっても全権はダギにあることはあきらかである。シディバラの公式記録である英宗本紀が、父の仁宗の無力さ、俯甲斐なさを証明して平気なわけである。ここでいう「兄」とは、コシラのことである。モンゴルでは、おなじ輩行のものどおしは兄弟 *aqa de'ü* と呼びあうので不思議とするのはあたらない。そのまま見ると、シディバラのうるわしい謙讓の逸話であるかのようである。しかし、じつはシディバラがコシラをたてるべきだと主張しなければならない事情があった。

それは、コシラのごく短い治世をしるす明宗本紀の冒頭に、次のようにみえる。

武宗、入りて大統を継ぐ。仁宗を立てて皇太子と為し、命じて次を以て帝（コシラのこと）に伝えしむ。

これは、さきのシディバラのことばに呼応する。武宗カイシャンは母親のダギに迫られて弟のアユルバルワダを「皇太子」とするのは了承したが、そのさい、そのあとには自分の長子コシラを立てるよう約束させたというのである。政治上の立場をことにする英宗本紀と明宗本紀が同一方向のことをしるすからには、事実であったと判断してまちがいないだろう。

さきのシディバラのことばは、この約束の履行をいったのである。あたりまえの美話ではない。少年王子のシディバラがそれを承知して恐るべき祖母のダギにたいしてあえて抗弁をこころみたくらいであるからには、この約束はカイシャン、ダギ、アユルバルワダ母子三人だけの「密約」ではなく、よく知れわたっていたことだったと考えざるをえない⁹²⁾。しかし、ダギはシディバラの当然の申し出を許さなかった。ダギとアユルバルワダは、カイシャンとの約定を反故にした。衆人がそれとわかる約束不履行であった。「登用」された漢族文人たちとその文集の沈黙は、見事である。

しかし、英宗本紀は逆に、それに触れざるをえない。シディバラにしてみれば、自分の立太子、そしてその後の即位は、背信にみちた理不尽な行為であっ

たことは誰もが知っているのである。おもてむき儒学と徳治を宣揚する仁宗政権の実態を、当の宣伝係りの文人たちをはじめ、当然みなが冷笑しているのを感じて、内外と後世にたいして演技するほど、そのときの少年シディバラが「英明」であったかどうかはわからない。ただ、それがいつの時点であったかはわからないが、シディバラはともかく自分の無罪証明をどこかに記録したかったのである。それがともかく、英宗本紀におけるけなげな皇子の姿となった。ただし、その結果、悪いのはすべて実権者の祖母ダギと腑抜けな傀儡の父アユルバルワダとなっても構わないかのようである。

明宗本紀では、前引記事につづけて、シディバラ立太子の経緯が前後ごく簡潔にこうしるされる。

武宗，崩じ，仁宗，立つ。延祐三年の春，東宮を建てんことを議す。時に丞相の鉄木迭而，位を固め寵を取らんと欲す。乃ち英宗を立てて皇太子と為さんことを議す。又た太后の幸臣識烈門と帝（コシラのこと）を両宮に讐る。浸潤すること之を久しくして，其の計，遂に行わる。是こに於いて帝を封じて周王と為し，雲南に出鎮せしむ。

両宮とは、皇太后ダギと皇帝アユルバルワダのこと。鉄木迭而はテムデル、識烈門はテムデルとならぶダギの寵臣で、その家政機関の長官である徽政院使のシレムン Siremün である。先掲の答己伝において、ダギにシディバラ擁立をすすめた「諸もろの羣小」とは、テムデルやシレムン以下の面々ということになる⁹³⁾ のち、大カアンとなったシディバラと対立することになる権臣テムデルとシレムンは、シディバラ推立の演出者であった。ここで肝心なのは、シディバラ立太子問題にからんで、周王受封・雲南出鎮というかたちをとったコシラのひきずりおろしと事実上の流謫が連動しておこなわれたことである。

そこで、ひるがえって仁宗本紀を見ると、コシラが周王に封じられたのは、じつはこの前年の延祐二年（1315）十一月甲戌、雲南へ護送つきで出立させられたのは、翌三年三月甲寅のことである。つまり、シディバラ立太子への地ならしは、仁宗本紀が立太子の正式日付として伝える延祐三年十二月の少しまえころどころのはなしではなく、明宗本紀が語る同年の春でさえない。すでにそ

の前年、コシラの周王受封というかたちで事があらわれるさらにそのまえから、ダギ、アユルバルワダ、テムデル、シレムンなどによって着々と手筈がととのえられていたことになる。延祐三年三月甲寅のコシラ一行の雲南への旅立ちは、先帝カイシャンとの約定の破棄、コシラの失脚、シディバラへの「皇太子」の交替が、いまや動かすことのできない既定の事実であることを大都内外の人々に印象づける効果をねらったものであった。すでにこのとき、事実上のシディバラ立太子の意志表示がなされたといってもいい。仁宗アユルバルワダとその宮廷・政府は、コシラ一行が出立した9日後の三月癸亥には上都巡行にむけ出かけているので、ダギ、アユルバルワダらは「皇太子」をめぐるコシラの処遇について、前年八月己丑よりこのときまでの大都滞在期間中に、なんとしてでも決着をつけてしまうつもりであったことが推測される。

この前後、関係する仁宗、英宗、明宗の各本紀を通観して、織りあわせていかなないと事態はつかみがたい。それぞれのもととなる実録がそれぞれの立場から編纂されているからである。⁹⁴⁾ 逆に、ある本紀が触れない事実は、その政権がおおいたかったことである。そうした目で眺めると、一見なんの変哲もない各本紀の記述のはしばしが生彩をもってよみがえる。それはまた、『元史』編纂上、ほとんど唯一とっていい「まともな文人」であった実質上の編纂責任者の宋濂が、モンゴル歴代の各『実録』におけるそうした記事の「バラツキ」を、それとして承知のうえで、あえて調整することなしに、そのまま節略して本紀を仕立てあげる方針をとったからでもある。そのほうが、じつは事態がよくわかるからである。宋濂にしてみれば、『元史』の読者に、そのくらいのことはわかってほしいのだろうし、そう読んでほしいのだろう。モンゴルに仕えたこともある宋濂本人は、モンゴル中央政局の変転をよく知っている。そのおりおりの郷里の金華やひろく江南出身の先輩たちの言動にも通じていた。そのことは、彼の文集『宋文憲公全集』にあらわれている。⁹⁵⁾

コシラの雲南行は、事変を生んだ。明宗本紀によれば、コシラの一は行は大都を出発してから8ヶ月後の延祐三年十一月、やっと延安にいたった。異様にゆ

っくりした旅程であった。そこに、カイシャンの「旧臣」たちが来会した。もと翰林侍講学士で、周王府の常侍に任命され雲南ゆきに扈従してきていた教化は、「天下は、我が武皇の天下なり」と蹶起をうながし、数騎とともに陝西行省へと馳せた。武皇とは、もとより武宗カイシャンのことである。また、ここにいう天下とは、単に中国や東方という意味ではなく、モンゴル帝国全体、すなわちほとんど「世界」というのにひとしかったのだろう。すでに冬期であるから、陝西行省は京兆（現西安市）にあった。

当時、陝西行省丞相は、東方系フウシン Hü'üsin 族⁹⁶⁾の当主で淇陽王の位をついでいたアスカン（阿思罕，阿撒罕 *Asqan*）であった。かれは、クビライ以来、大元ウルスを代表する元老として全モンゴルにその名がとどろいていたオチチェル（月赤察児 *Öčičer*）の後継者であった。オチチェルは成宗テムル時代から長く人臣最高の太師の位にすわり、対カイドゥ戦にはカイシャンとともに奮迅したばかりでなく、そのカイシャン登極後は全権を委任されてモンゴリア・中央アジア戦線にひきつづきとどまった。⁹⁷⁾ カイシャンは、あきらかに、北方王国の主人であるいとこの晋王イスン・テムルを信用していなかった。

アユルバルワダ政権が出現したのちも、さすがのダギでさえ、チンギス宿老の後裔という名流の出で、クビライ以来ずっと軍事の中枢におり、現在もなお大軍団を擁してモンゴリアに駐屯する実力者オチチェルにたいしては、カイシャンと親密であったからといって、そのままでは不用意に手出しをすることはできなかった。アユルバルワダの即位式が挙行された直後に、従来と変わることなく最高位の太師を進呈することを発表し、⁹⁸⁾ 腫物にさわるようにそのままモンゴリアに留めおき、敬して遠ざけていた。ところが、オチチェルは、仁宗初年にあたる至大四年（1311）、正確な時期はさだかでないが、その年のうちに入朝した。彼の伝によれば、大内の主殿である大明殿にて宴を賜わり（つまり、入朝時期は大都に冬営している間のこと、いいかえれば秋から冬のこととなる）、「眷礼優渥」であったが、「尋いで疾を以て第に薨」じたという。⁹⁹⁾ 仁宗政権にとっては、あまりに都合のよい他界であったといわざるをえない。

さて、アスカンであるが、仁宗本紀によれば、その翌年の皇慶元年（1312）

春正月甲辰に、

太師・録軍国重事・知枢密院事の脱児赤顔に開府儀同三司を授け、淇陽王を嗣がしむ。

とみえる。この脱児赤顔，すなわちトルチヤン *Torčiyān* ?こそ，じつは明宗本紀の阿思罕，三公表の太師の項の阿撒罕その人にあたる。それは，オチチェルの太師の位と東方系フウシン族長家の当主のあかしである淇陽王（華北投下領の淇州にちなむ）の号をひきついでいることからわかる。ようするに，オチチェル他界後すぐ，仁宗政府は新年恒例の朝賀のおりをとらえてその後継者のトルチヤンに開府儀同三司の尊号をくわえ，かれの継承を列席の諸王・貴族・臣将たちに披露したのである（つまり，オチチェルの他界とアスカンの相続とは，おなじ大都冬営期間のこととなる）。そのかぎりにおいて，手篤い処遇とってよかった。

この人物については，興味深い点があるので，なおいくつかのことに言及したい。ふりかえって武宗本紀をみると，至大二年（1309）八月甲戌に、

太師狐頭に名「脱児赤顔」を賜う。

とみえる。もともと，狐頭が本名であったことがわかる。さらに，三公表の太師の項には，至大三年・四年に「脱児赤顔」，皇慶元年から延祐二年まで「阿撒罕」とある。先引トルチヤンの皇慶元年における継襲の記事により，この両者が同一人物であることはあきらかである。¹⁰⁰⁾つまり，狐頭という人物は，カイシャン時代にトルチヤン，アユルバルワダ時代にはアスカンと二種の称号が授けられていた。モンゴル王族・貴族の間では，別名・他称をもつこと自体は，さしてめずらしいことではない。

さらに，武宗本紀には，前引記事をはさんで前後にふたつずつ，計4つの次の関連記事がみえる。

（至大元年八月戊申）特に狐頭に太師を授く。

（同年）冬十月庚寅，太師狐頭の為めに第を建て，鈔二万錠を給す。

（至大三年二月）辛未，脱児赤顔に録軍国重事を加う。

（同年三月己卯朔）脱児赤顔を以て知枢密院事たらしむ。

カイシャン時代にオチチェルは太師の号を帯びたまま和林行省右丞相としてモンゴリアに鎮した。その間、その後継者である瓜頭にたいして、武宗カイシャンは異例の特別措置として太師の位を重複して授けた。そして、おそらくは、自分の手もとにとどめ、第宅、トルチャンの別名、録軍国重事の肩書、知枢密院事の兼職と、つぎつぎに授与していったのである。瓜頭は、いわばもうひとりのオチチェルであった。オチチェル・瓜頭ふたりの人物がもつ政治上の重要性とともに、よほどの信頼ぶりがうかがわれる。

その瓜頭、すなわちアスカンは、三公表によって延祐二年までは太師であったことがわかる。ところが、明宗本紀にこうしるされる。

是れより先、阿思罕、太師と為るも、鉄木迭児、其の位を奪い、之を出して陝西行省丞相と為す。

アスカンは、ダギの寵臣テムデルに太師の位をうばわれたうえ、陝西行省に出されたのである。仁宗本紀は、それをしるさない。ただし、延祐二年十月丁酉(22日)、テムデルに太師が加えられたことだけをいう。そしてじつは、それから1ヶ月あまりのちの十一月甲戌、コシラの周王受封がしるされているのである。

アスカンの太師位の喪失と陝西への出向、コシラの皇太子位の喪失と雲南への出鎮は、ほぼ同時期になされたことであった。仁宗政権は、カイシャン派と目されるアスカンをまずたたいたうえで、コシラを追いおとしたのである。カイシャンの残影を徹底して一掃しようとしたのである。当初は優遇するように見せて、結局はアスカンを追いおとしたことから考えると、むしろ、政権が誕生したときから、この日をめざしていたと考えるほうが自然だろう。

延安のコシラ一行のもとから、教化が馬をとばして京兆のアスカンをめざしたのは、まさにこういう事情があったからである。アスカンは、これに応じた。明宗本紀によれば、アスカンはただちに陝西行省平章政事のタガチャル(塔察兒 *Tayačar*)、陝西行台御史大夫のトリ・ベク(脱里伯 *Toli Beg?*)、同中丞のトゴン(脱歓 *Toyon*)とともに、「関中の兵」を發して、潼関・河中府より「腹裏の地」へ打ち入ろうとした。陸路の関門である潼関からは河南へ、黄河の渡

河点の河中府からは山西へ、それぞれむかうことができる。しかし、タガチャルとトゴンは河中府でアスカンと教化を襲殺した。¹⁰¹⁾ あきらかに謀殺であった。

こうした一連のなりゆきは、はじめから、計算づくであった可能性が高い。というのは、明宗本紀によれば、遙授中書左丞相のトゥクルク（秃忽魯 *Tuqluq*）はコシラの周王府の首脳部にあたる常待の筆頭人として雲南行に随伴してきていたが、仁宗本紀によれば、そのトゥクルクがなんと延祐三年十二月庚午には陝西行省左丞相に任命されているのである。コシラの延安到着が十一月であるから、教化の京兆行、アスカンの挙兵・東征・敗死、トゥクルクの任命まで、一ヶ月以内におこなわれている。仁宗政府によるコシラの周王授封の真のねらいは、雲南へ実際に就封させることでさえなく、もうひとりの厄介な人物アスカンとともに陝西で叛乱をおこさせて「叛乱者」の名のもとに仕末してしまうつもりであったことになる。

これだけの争乱がおきていながら、仁宗本紀にはひとことの言及もない。前記トゥクルクの任命の18日後にあたる十二月丁亥に、シディバラの立太子の公式記録だけを平然と載せている。見事なまでのあざとさは、仁宗政権、そしてその『実録』をつくった英宗政権が、後世を意識して演出する体質をもっていたことを示す。そしてまた、アスカンの左遷から始まる1年あまりのさまざまなことからは、シディバラ立太子（すなわちカイシャン色の一掃）へむけての周到に仕組まれた布石であったことを物語る。

こうして仁宗アユルバルワダ政権は、首尾よく、シディバラの立太子が先帝カイシャンとの約定違反という不誠実なことではなく、当のコシラが不屈きにも「叛乱」をおこしたためのやむをえない措置であるという大義名分をととのえた。そして間もなく年があけ、翌延祐四年（1317）になると、正月十日に「赦罪の詔」を発した。その詔では、コシラやアスカンらの「不軌」「搆乱」を告発し、「叛賊」アスカン、教化、チェルケス（徹里思 *Čerkes*）らの斬首・鎮定を述べたうえで、「隆平の治」と自賛して「天下に大赦」した。¹⁰²⁾ さらに、これだけでは不十分とみたか、その翌月、閏正月丙戌には、「建儲の詔」をことさらに発した。¹⁰³⁾ しかも、そのおなじ日、鰥寡孤独のものに鈔を給し、各路

に免税をおこない、朝会した諸王・宗戚に（おそらくは毎年の定例賜与額とは別に）金・銀・鈔をふるまった。¹⁰⁴⁾ 民衆には、しつこいほど「仁政」をほどこし、モンゴル有力者には懐柔をおこなったのである。ダギとアユルバルワダにとって、立太子にかかわるなりゆきにはよほどうしろぐらいところがあり、そして完璧に成功したかに見えた結果によほど喜悅したのである。

仁宗本紀は、こうした演出がおこなわれた延祐四年正月の記事の劈頭を、アユルバルワダがその左右に語ったという「百姓賑恤」の美しいことばで飾る。それを反語して読めば、かれの心事がよくしのばれる。この前後、仁宗政権は、たとえば延祐三年（1316）四月壬午に殷の比干や唐の狄仁傑の祠廟・祭祀を復したり、六月乙亥に孟子の父母を邾国公・同夫人に封じたり、四年二月甲辰には各地の義倉を復活したりと、異様なほど中国風の「美事」をおこないたがっている。その一方で、政権出発時には、新政策の眼目として力説・自賛したモンゴル投下領におけるダルガチの領主自選制の停止（モンゴル采邑領主権の制限を意味する）については、同六月丙辰に、あっさり撤回してもとどおりにしている。¹⁰⁵⁾

「漢法」の徹底を称揚されがちな仁宗政権であるが、総じて政策そのものは、その場かぎりの「人気とり」めいたものが多く、一貫性を欠いている。とくに、シディバラ立太子以後は、政策といえるものもなく、政権全体が急速に尻しぼみになっているのが目立つ。ただし、自分たちの政権にたいする評判については、モンゴル領主層から、漢族士大夫・読書人、一般民衆にいたるまで、中国本土とその周辺にいる各層の人間の動向を一貫してひどく気にしている。後世の清朝などとはちがひ、よくもわるくも評判や悪口・非難などをあまり気にすることのない歴代のモンゴル政権のなかでは、変わった性癖をもっていたといわざるをえない。延祐二年（1315）二月己卯朔には、第一回目の会試がおこなわれた「再開科挙」も、こうした政権の体質、政治上の文脈を勘案したうえで、とらえる必要があるだろう。

明宗本紀によれば、コシラはアスカン、教化の敗死後、やむなく西行し、

「金山」すなわちアルタイにいたった。すると、「西北諸王の察阿台等，帝の至るを聞き，咸な衆を率いて来附」したという。「西北諸王の察阿台」とは，チャガタイ Čayatai~Ča'atai 家の当主を意味する。当時は，エセン・ブカである。こののち，コシラはチャガタイ・ウルスと「約束を定め」て「十余年間，辺境謐」であったという¹⁰⁶⁾

このささやかな一文の意味するところは，じつはたいへん重大である。コシラは，父カイシャンとの旧好からチャガタイ家に身を寄せたのである。しかも，父の駐营地であったアルタイ方面の地を牧地としたうえで。一方，チャガタイ・ウルスは，これよりほんのしばらくまえ，アルタイ方面駐屯の大元ウルス軍と武力衝突をひきおこし，チャガタイ・ウルス領の奥深く，マー・ワラー・アンナフルちかくまで差しこまれていた。カイシャンとドゥアの提携による「チャガタイ・ウルスの成立」以来ほぼ10年，ウルスの存立にかかわる危機に見舞われていたのである。このあたりの事情は，ペルシア語年代記『オルジェイトゥ・スルターンの歴史』*Ta'rih-i Ūlgāitū Sultān* にくわしい¹⁰⁷⁾

仁宗アユルバルワダ政権が，シディバラ立太子をめぐる策謀に熱中している間，アルタイ以西の地域では大会戦が展開していたのであった。しかも，圧勝をつづける大元ウルス軍の司令官は，キプチャク族とおぼしきトガチ・チンサン (*TU: Tūgāgi Ġinsānk > Toyači Čingsang*. 脱火赤拔都児，脱禾出八都児)¹⁰⁸⁾，やはりキプチャク族のチョングル郡王 (*TU: Ġūnqūr > Čongyur*. 創兀児，牀兀児，床兀児)，そしてカンクリ族のブルルギ (*TU: Bulārgi < Bularyi*. 孛蘭奚) などであった¹⁰⁹⁾。かれらは，じつはことごとくアルタイ駐留時代のカイシャンの麾下で働いた面々であり，さらにひきつづくカイシャンの治世には，かの太師・淇陽王オチチェルの指揮下にいたものたちであった¹¹⁰⁾。つまり，生粋のカイシャン派なのであった。

ようするに，カイシャン派の諸将がひきいるアルタイ方面の大元ウルス駐留軍が，チャガタイ・ウルス軍を押しまくって中央アジアを西へ快進撃をつづけるという異常事態のさなか，亡きカイシャンの遺児であるコシラが大元ウルス中央部より追われて飛びこんできたのである。事態は，一変せざるをえなかつ

た。

じつは、このあとアルタイ以西がどうなったのか、東西史料のはざまに入りこんで、文献上の明文はない。しかし、状況証拠はそろっている。チャガタイ・ウルスは復旧している。一方、アルタイ駐留の大元ウルス軍が敗北したという形跡もない。にもかかわらず、大元ウルス西面の甘肅・陝西・陰山方面一帯はひろく「叛王脱火赤」による大動乱につつまれる¹¹¹⁾ この脱火赤は、前述の將軍トガチ・チンサンか、甘肅の涼州を本拠とするオゴデイ系コデン Köden 王家の当主トガチか、ふたつの可能性がある。肅州あたりを本拠に、甘肅からコムル Qāmul < Qomul, さらにはビシュ・バリク Biš Baliq 方面に勢力を扶植しつつあったチャガタイ系チュベイ Čübei 一門が、この動乱にまきこまれていることなどから見ると、後者とするほうが説得力がありそうであるが¹¹²⁾ しかし少なくとも現在の史料状況のままでは、厳密には決定できない。しかし、どちらの「脱火赤の乱」にせよ、その政治上の意味と影響は甚大といわねばならない。

ようするに、こと核心は、先述の明宗本紀が語るコシラとチャガタイ家の合体と見てまちがいない。コシラの来投によって、アルタイ方面の大元ウルス軍は軍事行動を停止し、チャガタイ・ウルスと和解したのである。もともと、手違いと仁宗政権の処理能力の欠如からおきた軍事衝突であった。カイシャン以来、両軍の間に根本からの溝はない。チャガタイ・ウルスは救われた。かたや、アルタイ方面の大元ウルス軍の少なくとも一部は、「叛王トガチ」の鎮定にむかわざるをえなくなる。そして、今度はアルタイ以西あげて、コシラをいただく政治連合体が出現した。それは、アルタイ駐留時代のカイシャンとドゥア一門との連携をそのまま再現したものであった。

仁宗本紀・英宗本紀をはじめ、この時期の漢文文献が、この新しい大状況の出現にまったく触れようとしないのは、仁宗・英宗両政権の性格と心情を語ってやまない。じつは、次の泰定帝イスン・テムル時代の文献は、注意深く眺めると、このコシラ・チャガタイ連合について、それなりに語っているのである¹¹³⁾ すでに述べたように、シディバラの立太子後（すなわちコシラの西走后）、仁

宗アユルバルワダ政権は異常なほどに中国本土むけの「美事」やモンゴル領主層の懐柔に努めているが、このことを背景に考えれば、その理由はよく了解できる。延祐三年の末から翌四年の冒頭、ダギとアユルバルワダが東の間に味わっていた満足は、長くはつづかなかつたと見ていい。かれらにとって、陝西でコシラを取りにがしたのは大失敗であった。延祐四年（1317）以後、モンゴル帝国はアユルバルワダとシディバラの大カアン政権、コシラとチャガタイ家の中央アジア連合の間の対峙が、史料にはそれと見えないかたちでつづいてきたと考えざるをえない。ペルシア語史料の筆が、少なくとも1320年代後半までは十分可能であるにもかかわらず、アユルバルワダの即位式の記事を最後に東方に及ばなくなるのも、あるいはこれが一因かもしれない¹¹⁴⁾

ひるがえって、仁宗とその宮廷・政府は、モンゴル全体に立つ大カアン権力としてみると、内外両面で委縮した弱体政権といわざるをえない。三大王国を基本とする帝国の連携は、あやうく、かすかなものになりかけている。そして、従来もうひとつ重大な点が見逃されている。それは、1328年、泰定帝の殂落後にまきおこった大動乱「天曆の内乱」に関連する。

帝国をゆるがした動乱の前半で、いったん勝利をおさめたかに見えたカイシヤンの次子トク・テムルをいただく大都政権を、その後半において実兄コシラが中央アジアよりモンゴリアを經由して「大返し」をかけ屈伏せしめる。それは、ちょうどそれよりも21年まえのカイシヤンとアユルバルワダの再現であった。ちがうのは、大カアンとなった明宗コシラが父カイシヤンゆかりのオングチャドゥの地にまねきよせられて大都側の中心人物キプチャク族のエル・テムル El Temür によって謀殺されてしまうことである。しかし、ともかくコシラの即位を実現せしめた軍事力こそ、チャガタイ・ウルスを中核とした大兵团なのであった¹¹⁵⁾ それは、これまでに述べた事情を背景としなければ、ありえないものであった。

(3) テムデルとシディバラ

延祐七年（1320）正月辛丑（21日）、仁宗アユルバルワダが享年36歳、在位

あしかけ10年で他界すると、ダギはむすこの崩御からわずか3日後に、中央政府首班である右丞相を自分の命令ですげかえた。すなわち、現職の右丞相パーデシャー（伯答沙 Pers. *Pādšāh* ~ *Pādišāh*. あきらかにペルシア語に由来する名であるが、モンケ時代にその政権中枢にいたジャライル族の有名なモンケセル *Möngkeser* の孫。伝統モンゴル勲臣の家柄¹¹⁶⁾）をしりぞけ、テムデルを復職させた。自分が仁宗時代と変わることなく、大元ウルスの実権者にほかならないことを、あらためて内外に明示するためであった。

これよりさき、テムデルは、仁宗時代の延祐四年（1317）六月乙巳に、内外40余人の監察御史の連名による「姦貪不法」という弾劾をうけて、二度目の右丞相よりふたたび退いていた。¹¹⁷⁾ ただし、かれは完全に失脚したわけではなく、ダギの強い庇護は変わらなかった。¹¹⁸⁾ 延祐六年（1319）四月庚子には、やはり内外の監察御史40余人の反対があったにもかかわらず、なんとシディバラ皇太子の太子太師とされているくらいであった。¹¹⁹⁾ 延祐四年の右丞相よりの更迭も、実権者のダギとしては、現政権にたいする非難の集中をかわすための一時の方便にすぎなかったと考えられる。

というのは、延祐四年六月といえは、まだ「叛王脱火赤」の争乱が諸方を震駭させているさなかであった。また、おそらくは、前述のコシラ・チャガタイ連合の出現が、もはやおおいがたい事実として仁宗政権下の人々にも認識されるようになっていた時期でもあった。それに、そもそも弾劾理由とされたテムデルの「姦貪不法」も、今更いいだすほど出来あいのものでもなかった。

もちろん、御史中丞の楊ドルジ以下、ウルン・テムル（玉龍帖木児 *Ürüng Temür*）、イリンチン（亦輦真 *Irinčin*）、徐元素らが中心となったとおもわれる監察御史たち40余人¹²⁰⁾の集団弾劾それ自体は、それはそれで果敢であり、死をも賭した壮挙ではあった。しかし、その反面、あきらかに内外ともに威信のぐらついていたダギ-テムデル政権の足もとを見透した点も否定できない。だからこそ、ダギもテムデルをひとまず政権の表面から引っこめたのである。

つぎのシディバラ政権とのつながりで注目されるのは、延祐四年六月のテムデル更迭前後から当分の間、監察御史など御史台系列のものたちが、しきりに

テムデルをはじめ徽政院・宣徽院の関係者（テムデルも、もと宣徽院使であったところから抬頭した）など、ダギ周辺の近侍・側近・寵臣たちにたいして弾劾をこころみていることである。かなり目につく頻繁さといっている¹²¹⁾。それは、こうした動きの背後に、テムデルとそれにつらなるものたちを牽制ないしは追い落としたい人間の存在を示唆する。

少なくとも、監察御史たちの直接の最高責任者である御史大夫のバイク（伯忽 *Baiqu*）は、官職上、その活動と無縁ではありえない。バイクは、テムデルが病氣治療のため最初に右丞相から退かざるをえなかった皇慶二年（1313）に、そのころはまだ健在であった太師アスカンに次ぐ太傅の位を受けられ、そのごずっとそれを保持していた¹²²⁾。延祐元年（1314）九月己巳にテムデルが右丞相に復し、翌二年十月丁酉には失脚・左遷させられたアスカンに代わって太師とされて、名実ともに最高の権臣となってからも、仁宗政権の2番目の男は、バイクであった。さらに、延祐六年（1319）閏八月壬申には、監察御史たちの集団弾劾でテムデルが再度の退職をしたあと空位のままとなっていた太師の位にさえすわっている。その5ヶ月まえに、テムデルは太子太師とされているのだから、皇帝アユルバルワダの太師はバイク、皇太子シディバラの太子太師はテムデルというかたちとなって、そのまま仁宗崩御をむかえるのである。このふたりの対抗関係は、うたがいをいれない。

そして、おそらくそのバイクのさらに背後には、皇帝アユルバルワダその人がいた。もともと、アユルバルワダとテムデルの仲は、けっしてよくなかった。アユルバルワダにしてみれば、右丞相テムデルは政権出発時から一貫して押しつけられた人事であった¹²³⁾。テムデルの暴政は、そのまま皇帝アユルバルワダの不名誉となってはねかえった。とりわけ、延祐三年の末から翌年にかけて、コシラを取り逃がしたうえ、チャガタイ家との連合をゆるしてからは、テムデルとの間は急速に冷却化した。それまでの策動となりゆきのすべてが、否応なく大カアンの陰謀として、彼の名で全モンゴル帝国に知れわたることとなったからである。事実、これをさかいに、西方の三大ウルスからの遣使は、彼の在世中については見られなくなる¹²⁴⁾。

みずから好んで文化庇護者と仁政の英主という美名を演技・演出したことからわかるように、アユルバルワダは名誉心だけは人一倍つよかった。彼は、実際の政務にはうとい分だけ、実務にあたるテムデルをいっそう憎悪した。仁宗時代の後半、漢文文献はすべての罪悪をテムデルに押しつけようとしている。しかし、それは権威者と執政者のちがいである。象徴機能と統治機能の対立とっていい。ところが、その執政者テムデルは、いまや権威者アユルバルワダをこえて、実権者ダギの偏愛を一身に集めていた。延祐四年六月の集団弾劾のさい、皇帝アユルバルワダは右丞相テムデルを殺害するつもりであった。仁宗は、その名とは裏腹に殺戮が嫌いでない。しかし、テムデルがダギの宮中に逃げこんだため、結局は手出しができなかった。その決着がつくまでの数日間、仁宗は日ごろ酩酊していた酒も口にできなかったという。¹²⁵⁾

ひきつづく異様な「大天災」と展望の見えない財政危機。そして手づまりの中央アジア情勢。こうした内外の苦況にくわえ、政権中枢の内部では、絶大な実権者である老女ダギをめぐる、名目上の権威者である皇帝と実質上の執政者である第一の権臣が嫉妬と憎悪で対立をふかめ、それぞれの取りまきともどもに、湿度のきわめて高い暗闘と足のひきあいを展開していた。これが、仁宗アユルバルワダ政権末期の姿であった。なお、仁宗の死因については、いまのところ異常な点は見あたらない。崩御の前年、延祐六年（1319）十二月壬戌には、皇太子シディバラに国政への参決が命じられているので、そのころからすでにうわべだけの執務もむつかしくなっていたと見てまちがいないだろう。

仁宗の他界は、テムデルにとって勿怪の幸いであった。新帝となるシディバラの太子太師、すなわち教導役であったのも、彼の立場をいっそう有利にした。これまでいわれているように、シディバラとテムデルは、かならずしも、すべてがすべてははじめから対立していたわけではない。

ダギの命で、2年半ぶりに中央政府首班に復帰したテムデルは、シディバラが即位式をあげるまでの皇帝不在の46日間、ほとんど専権と復讐に日を費したかのように記録されている。ただこの間、おもてだつて采配を振れるのは、彼

だけであった。まず、中央政府の宰臣たちを自派のものに入れかえた。オングト Önggüd 族の軍事貴族の裔である趙世榮を平章政事に、江西行省右丞のムバーラク（木八剌 *Mubārak*）を右丞に、参知政事の張思明を中書左丞に、それぞれ引きあげた。それにともなって、平章政事のウバイドゥッラー（兀伯都剌，烏伯都剌 *‘Ubaidullāh*）を甘肅行省平章政事に、おなじくエリク・カヤ（阿礼海牙 *Elik Qaya*）を湖広平章政事に追いだした。とくに、ウバイドゥッラーは、武宗カイシャン時代以来、13年間も宰臣を歴任していた。よほど、有能で政権運営に不可欠な財務官僚であったことが、その官歴からうかがわれる。ただ、従来これらの人事異動を恣意だとするが、宰臣の更迭・改組それ自体は、非難すべき筋合いのものではない。本来の命令権者が不在のさなかであることに問題がある。

ついで、テムデルは、かつて自分の弾劾免職の中心人物となった前御史中丞のタングト族の楊ドルジと、平章政事として自分を牽制したキタン族の蕭バイジュ（拜往）を「太后の旨」にたがえたとして殺害し、それぞれの家を籍没にした。¹²⁶⁾ それに先立って、前平章政事の李孟が受けていた秦国公の制命をとりあげ、その先祖を追頌した墓碑をうちたおさせた。¹²⁷⁾ テムデルは、たしかに楊と蕭には邪魔されたと考えていたのだろう。科举再開のほかになにもしなかった李孟については、腹いせで十分であった。テムデルにとって、殺すほどの人間でなかった。楊・蕭の処刑が命じられたその日、徽政院使のシレムンは、やはり太后の命を楯に政府官僚の更迭をねがったが、皇太子シディバラはさすがに、即位前であることを理由に、これは拒否した。¹²⁸⁾

ここではむしろ、皇帝選出以前におけるダギとシディバラの行為こそ問題であった。テムデルの放恣は、ふたりの命令・承認のもとでおこなわれているのである。仁宗即位前のときとおなじで、本来ならふたりに権限はない。仁宗の正后で、シディバラの生母でもあったアナシシリ（阿納失失里 *Anasisiri*）は健在であった。しかし、もはやこの両人は、それにまったく頓着していない。祖母ダギは新帝となるシディバラが自分の傀儡であることを当然の前提のように振舞い、シディバラはテムデル以外の人間がダギの代理人となる場合だけ、

かすかに押しかえそうとしている。シディバラに楊ドルジ・蕭バイジュらの助命、李孟の救済をはかる気配は皆無である。

延祐七年三月庚寅、17歳の少年シディバラは父の逝去から49日のちに即位式をあげた。しかし、このときの集会は、新帝選出に不可欠なはずのクリルタイとしては、おそらく名だけあって、中身においては、ほど遠いものであった。それは、新帝登極にともなう帝室・諸王・貴族・臣僚にたいする恒例の塊飯振舞である「大賚」の総額が、即位式から八ヶ月もすぎた同年十一月戊寅に会計報告されていることである。¹²⁹⁾ それまでは、即位と同時に大量の賜与がいわば引出物としてあたえられ、その時期どおりに記録されている。八ヶ月後の一括報告ということは、賜与が「さみだれ」式におこなわれたこと、いいかえれば、即位式そのものには大した人数は参集していなかったことを物語る。

くわえて賜与総額も、成宗テムルや武宗カイシャンの「バラマキ」は別格として、緊縮財政を理由につましい賜与額にとどまった仁宗アユルバルワダの場合とくらべても、金が約8分の1、銀が約5分の2にすぎなかった。¹³⁰⁾ いかに財政苦況にあったとはいえ、個々の賜与額の減少だけではなく、やはり賜与された人数そのものの少なさも意味するだろう。まことにささやかな即位式であったといわざるをえない。ダギ-テムデル政権の威信の低下は、もはやおおいがたかったのである。

シディバラ新政権が自他ともに認めるダギ傀儡政権であったことは、漢文による即位の詔によくあらわれている。

諸王・貴戚、元勳、碩輔、咸な謂えらく、朕は宜しく先帝付託の重、皇太后擁護の慈を体すべしと。¹³¹⁾

もはやここには、新帝の抱負などどこにも見あたらない。参集した顔触れも、あながち即位詔の文飾ばかりでなく、ダギに迎合するものが大半だったのだろう。

即位式後、新帝シディバラがその日のうちにしなければならなかったのは、恒例の大赦のほか、ダギに太皇太后の尊号をたてまつることであった。そして翌々日、太皇太后ダギは自分のオールドである大都城内の興聖宮で百官の朝賀を

うけ、あわせて右丞相テムデルは開府儀同三司・上柱国・太師の位を加えられ、まさに位は人臣をきわめた。このとき、皇帝シディバラは、まったく無力というほかなかった。大カアン権力の空洞化は、ここにきわまった。

シディバラは、ダギとテムデルとの協調を保ちながら徐々に実権の回復とダギ周辺勢力の消去をはかった。地に堕ちた皇帝の奪権闘争であった。その手だてでは、大元ウルス随一の名門であるジャライル国王家の血脈バイジュの起用であった。バイジュ自身の才幹よりも、チンギスの片腕ムカリ Muqali の裔、クビライの名臣アントン Antong の孫（現実のアントンは無能で、その父バートル Bayaturこそクビライ政権成立の鍵となった人物であったが、のち賢帝クビライ・名宰相アントンと一組にしてイメージ化された¹³²⁾）という最高の血筋の権威を借りて、テムデル以下の中書左丞相ハサン（哈散，阿散 *Hasan*），徽政院使シレムン，御史大夫トクトガ（脱忒哈，秃忒哈，秃秃哈 *Toqto-ya*。彼は、ジャライル国王家とならぶもうひとつの名門アルラト Arlad 族の広平王家の当主¹³³⁾）らをおさえようと考えたのである。

即位の翌月の四月庚申、英宗シディバラは太常礼儀院使バイジュを中書平章政事に引きあげた。中央政府に関して、英宗がおこなったほとんど最初の人事であった。ときに、バイジュは25歳。翌五月己丑（11日）には、左丞相ハサンを罷免して嶺北行省平章政事に転出させ、バイジュをその地位につけた。

ところが、その9日後の同月戊戌（20日）、密告があり、そのハサン以下、中書平章政事の黒驢（もしくは赫驢）、御史大夫トクトガ、徽政院使シレムンらの廃立計画が判明した。英宗シディバラはバイジュに命じて衛士をひきいて全員逮捕させ、斬殺のうえ各家をすべて籍没した。そのさい、取り調べの必要をいうバイジュにたいし、英宗は「あやつらが、もし太皇太后を理由にしたら、どうするのだ」といって全員のすみやかな誅戮を命じたという¹³⁴⁾。本当に廃立計画があったかどうかはわからない。ただ、テムデルをのぞくダギの主要な寵臣を一気に殲滅させたシディバラの手腕は、じつに果断・峻烈であった。

しかも、それだけではなかった。同月甲辰（26日）には、この月の2日（庚辰）

にテムデルが私怨から殺害のうえ棄市・籍没した上都留守の賀バヤン（伯顔 Bayan. 中国名は勝¹³⁵⁾）の事件とあわせ、ハサン・黒驢らの誅殺を布告する詔をわざわざ発した。さらに丁未（29日）には、その賀バヤン、シレムン、ハサンの家貲・田宅を、なんとテムデルらに下賜するという措置をとった。もとより、あてつけであった。¹³⁶⁾

賀バヤンの事件は、先にテムデルに殺された楊ドルジ・蕭バイジュと関連し、あきらかに冤罪であった。¹³⁷⁾ しかし、シディバラは、それについてはあえて沈黙して救うことなく、テムデルの自儘にまかせた。自分のほうは、ハサン以下の大官たちを有無をいわずに皆殺しにして、それと抱きあわせのかたちで両方の殄戮を天下万民とともに慶祝しようとしたのである。テムデルへの痛烈な皮肉にほかならなかった。とても17歳とはおもえないシディバラの冷徹・酷薄なやり口は、仁宗時代の隠微でねちねちとした政治駆引きに馴れた宮廷・政府関係者には衝撃であった。実権を握るダギとテムデルにたいし、露骨に挑発したのである。おそるべき少年皇帝であった。

しかし、そのごの2年あまりは、太皇太后ダギと右丞相テムデル、皇帝シディバラと左丞相バイジュの二本の軸が、奇妙な均衡を保ちながら共存した。両軸は、ときに協力しあい、ときに相手を威嚇・牽制した。ダギには、身代わりの傀儡を立てたくても、もはやシディバラ以外に直接の近親者はいなかった。¹³⁸⁾ シディバラにしても、現在の帝位はダギの力によってあたえられ維持されていることを否定できなかつた。旧安西王国の一族、旧カイシャン与党など、このダギ-シディバラ政権そのものを転覆させたい勢力は広汎にいた。政権維持の点では、両軸は共通の利害のうえにいた。双方、なかばもたれあい、相手に回復不可能な打撃をあたえるのを微妙に避けた。¹³⁹⁾ そのありようは、若年組が老年組にたいして、じりじりと権力委譲を迫ったとっていい。両陣営が正面からたたきあったとする考えは、誤解である。なお、この間の政策では、当然の救荒対策が目につくくらいで、他はおおむね仁宗期をひきつぐ。シディバラの関心は、実権の回復にあり、「新政」のことばはあっても、時間がなかった。

テムデルとダギは、おだやかに病死した。テムデルは、執政者が実権者とな

りゆく形勢を、よくもわるくもひらいた。事態は、両人の他界後に急変した。一気に皇帝権力の回復をはかる英宗シディバラとバイジュが、容赦なく旧テムデル与党を片端から肅清していったからである。¹⁴⁰⁾ シディバラは、果敢すぎた。無条件に抹殺するあまり、一方で孤立し、¹⁴¹⁾ 一方で肅清をおそれるものたちを恐怖で結束させ、事変の劇発をまねいた。最後の成功者となったテクシらのシディバラ打倒計画は、事件の5ヶ月もまえから、さまざまな立場・利害をもつ数多くの諸王・要人たちをまきこんで大掛りにすすめられたものであった。¹⁴²⁾ ここに、事態は大きく転回した。

(三) なぜ泰定帝イスン・テムルか

(1) 奇妙な即位の詔

テクシらは、新帝にモンゴリア王である晋王イスン・テムルの擁立を予定して謀反計画をたて、すでに晋王家の要人との談合も済んでいた。¹⁴³⁾ 至治三年(1323)八月癸亥、テクシらが英宗を暗殺すると、九月癸巳、イスン・テムルはケルレン Kerülen 河畔で即位した。

そのときの詔は、『元史』泰定帝本紀の冒頭に全文が載る。モンゴル語を直訳した白話風漢文でつづられる。かつて、顧炎武は『山東考古録』のなかでこれに触れ、「文は鄙俚を極む」といい、こうしたモンゴル語直訳体白話風漢文でしるされるモンゴル時代の「聖旨」を「一笑を發す可し」と評した。顧炎武らしい文明主義である。その後は、シャヴァンヌ É. Chavannes によってこうした文体の意義が認識され、馮承鈞・陳垣・蔡美彪らも論及・採録した。¹⁴⁴⁾ 今では顧炎武のような意見は、さすがに影をひそめたが、正史に載る奇妙な文体の詔としてよく知られている。

この即位詔は、さまざまなかたちで伝存するモンゴル語直訳体白話風漢文文献のなかでも、¹⁴⁵⁾ 文体・語法・訳語などの面で注目すべき点をふくむ。そして、それにもまして、政治史上の意味は大きい。そこでまず、全文の現代日本語訳をこころみ、ついで歴史上の検討をおこなう。なお、繁雑を避けて、叙述上で最低限必要な歴史用語の簡単な注解だけ本文に付記するにとどめ、言語文献上

で必要な諸点は、後注に一括する。

セチェン・カアンは、いおとしき嫡孫にして裕宗皇帝の長子、わがいつくしみ深きカマラ・エチゲを封じて晋王を授け、チンギス・カンの4つの大オールドを統轄させ、また軍・馬・モンゴル国土をすべてゆだねた。セチェン・カアンのおおせどおりに、細心につつしみ、およそ軍・馬、人民のことはどんなことでも、ただしいみちを守っておこなったので、数年の間、百姓は安らかに暮らせた。のち、オルジェイトゥ・カアンは、わたくしに位を継承させ、大オールドをゆだねたのであった。すでにゆだねられた大ヌトゥクを見守って、ふたりの兄クルク・カアンとブヤントゥ・カアン、おいシディバラ・カアンを擁立した。わたくしが歴代のカアンにたいしてふたごころをいだかず、位をねらわず、本分に従ってウルスのために力をつくしてやってきたのは、諸王なる長幼同族たち、もろもろの百姓らもみなわかっていることなのだ。

今、わたくしのおいカアンが昇天したぞと、南方の諸王・大臣、軍にある諸王・駙馬・臣僚、モンゴル百姓たち、みなが相談して、大いなる位は長く空いてはよくない、わたくしだけがセチェン・カアンの嫡統で裕宗皇帝の長孫である、大いなる位にすわるべきことわりである。その他の即位を争う長幼同族もいない、このように崩御してからおさまりがつくまで、人心ははかりがたい。百姓を安撫して天下の人心を安寧にさせるには、すみやかにここで即位すべきだというので、みな的心に従って、秋のおわりの月のはじめの4日に、チンギス・カンの大オールドにて、大いなる位にすわったぞ。もろもろの百姓らを心やすらかにさせるため、大赦の文書をくだした。

薛禅皇帝，可憐見嫡孫，裕宗皇帝長子，我仁慈甘麻刺爺爺根底，封授晋王，統領成吉思皇帝四箇大斡耳朵，及軍馬・達達国土都付来。依著薛禅皇帝聖旨，小心謹慎，但凡軍馬・人民的不揀甚麼勾當裏，遵守正道行来的上頭，数年之間，百姓得安業。在後完沢篤皇帝，教我繼承位次，大斡耳朵裏委付了来。已委付了的大營盤看守著，扶立了兩箇哥哥曲律皇帝・普顏篤皇帝・

姪碩德八剌皇帝。我累朝皇帝根底，不謀異心，不圖位次，依本分与国家出氣力行來，諸王哥哥兄弟每，衆百姓每，也都理會的也者。今我的姪皇帝生天了也麼道，迤南諸王・大臣，軍上の諸王・駙馬・臣僚，達達百姓每，衆人商量著，大位次不宜久虛，惟我是薛禪皇帝嫡派，裕宗皇帝長孫，大位次裏合坐地的體例有，其余爭立的哥哥兄弟也無有，這般晏駕其間，比及整治以來，人心難測，宜安撫百姓，使天下人心得寧，早就這裏即位，提說上頭，從著衆人的心，九月初四日，於成吉思皇帝的大斡耳朵裏，大位次裏坐了也。交衆百姓每心安的上頭，赦書行有。

【歴史語彙・特殊用語の対照簡易表】 薛禪皇帝：*Sečen qayan*. 「賢明なカアン」の意。クビライのこと。 裕宗皇帝：*Činkim*. 裕宗はチンキムの廟号。即位していないチンキムを皇帝と称するのは，チンキム系であるイスン・テムルから見て追尊した表現。 甘麻剌爺爺：*Kamala~Kammala*. 爺爺は「父親」だから，その意のモンゴル語 *ecige* の訳語。「カマラ父君」の意。 四箇大斡耳朵：いわゆるチンギス・カンの四大オルドのこと。 軍馬：ここは「軍馬」ではなく，「軍」と「馬」と解す。「軍」は *čerig*，「馬」は *aqta*，もしくは *adu'u*. 達達国土：達達は *Tatar* の音写でモンゴルをあらわす。達達国土は，達達の国土か達達の国と土のどちらか。前者ならば，元代漢文典籍にしばしば見える達達地面と同義となる。すなわち，近現代におけるモンゴリアにはほぼ相当する。後者ならば，*ulus* と *yajar* の各訳語となる。 聖旨：原語は *jarliq*. モンゴル時代，大カアンの命令・ことば・命令文書・書簡だけをジャルリク，すなわち「おおせ」といい，他の帝室・諸王・后妃・将相のそれはウゲ *üge*，すなわち「ことば」といって明確に区別した。 人民：おそらくこのモンゴル語原語は *irgen* だろう。 勾當：原語は *üile(s)* 「こと，行為，仕事，公務」を意味する。裁判・司法上で使われると，結果として「訴訟，裁き」の意味にもなる。 完沢篤皇帝：*Öljeitü qayan*. 「幸いもてるカアン」の意で，成宗テムルのモンゴル語の廟号。 大營盤：*Yeke nu(n)tuq* の訳語か。ヌトゥクは，「牧地，季節移動圏，ふるさと」などを意味する。テュルク系の言語の *yurt* に相当する。 哥哥：兄を意味する *aga* の訳語。 曲律皇帝：*Külüg qayan*. 「駿馬なるカアン」

の意。カイシャンの中国式廟号の武宗にあたるモンゴル語の廟号。普顔篤皇帝：*Buyantu qayan*。「富徳あるカアン」の意。アユルバルワダの中国式廟号の仁宗にあたるモンゴル語の廟号。国家：ここでは、王朝、朝廷、公家の意味とせず、モンゴル語 *ulus* の対応語と考える。気力：「ちから」の意の *kücü(n)* の漢訳語。ペルシア語の年代記でも *küç dādan* 「力をあたえる、力をいたす、仕える」の意で頻用される。哥哥兄弟：これ全体で「あに・おとうと」を意味する。モンゴル語 *aqa de'ü* の訳語。ペルシア語の年代記では *āqā va īnī* のかたちであらわれる。「兄・弟」の原義から、「長幼、はらから、同族、一族」を意味し、とくにチンギス一族の意味でも使われる。迤南：『元典章』など元代の政書・公牘にあらわれる「迤北」に対応する語。モンゴリアより南方全域をさすと考えられる。体例：「きまり、ことわり、理由、道理、通例」をあらわすモンゴル語 *yosun* の訳語。

詔の内容は、大きく前段と後段に分かれる。前段では、晋王家の歴史の大略を述べる。チンキムの長男であるカマラがクビライ時代に晋王に封ぜられ、チンギス時代以来のモンゴル本土とそこに展開する四大オールド・モンゴル騎馬軍団をゆだねられたこと（「数年の間」とは、カマラの晋王在位期間をいう）、成宗テムル時代に、イスン・テムルがそれを継承し、ふたりの兄（本当はいとこ）のカイシャンとアユルバルワダ、そしておい（本当はいとこの子）のシディバラの即位を推進し、成宗テムルから英宗シディバラ時代まで、ずっと帝位に邪念をもたず、「ウルスのために力をつくして」きたことをいう。モンゴル帝国とクビライ王朝の安定は、自分たち父子が30年余にわたり、モンゴルにとって「国家の根幹」であるモンゴリアと伝統の千戸群を保持したからだと主張しているのである。これは、事実である。

後段では、シディバラの暗殺と自分の即位の大義名分を語る。その理由づけの第一は、まずなによりも自分の即位は、「南」（ここではコビ以南をさす。大元ウルスの本拠地は、内蒙と華北である）の中央政権の王族・宰相、各地に出鎮・駐屯している王族・姻族・将官、そしてモンゴル民衆たちの総意にもとづくことを強調する。それら三種の人々の協議の結果なのであって、恣意や篡奪

ではないといたいのである。それらの人々の協議内容としてあげられるのは、帝位が長く空位ではよくないこと（これは帝国全土にわたるクリルタイをちゃんと開かないことの弁明である）、チンキム、カマラ、イスン・テムルと嫡長子をつないだ自分こそがクビライ家の「嫡派」なのであり、自分が帝位につくのは正当であること（これには、帝位継承から排除されてきた自分たち父子のそれまでの不満を述べる面もある）、他の候補者もないこと（対象となるチンキムの孫・曾孫の世代では、ということであるが、本当はコシラがアルタイ方面にいる）、大カアン他界後の人心安定のためにはすぐにこの場で即位したほうがよいこと（皇帝暗殺という異常事態であることを言外にいい、モンゴリア王として、いまや随一の実力者となった自分が即位するのは当然のなりゆきであり、その即位式の間が自分の本拠地であるのは、やむをえない仕儀であることをいう）、の4点である。しめくくりには、即位式は、国家草創の英主チンギス・カンの大オールドのあるケルレン上源の草原でおこなわれたこと（すべてのモンゴルにとって原点となる由緒のある場所で即位したことをいう）、天下に大赦をおこなう文書、すなわちビチク *biçig* をあまねくくださったことで終る。

じつにわかりやすい詔である。自分の血統と立場が特別なものであることを誇る点、暗殺者たちと組んだうえ、全帝国あげてのクリルタイをもよおさないうしろぐらい即位であることへのいいわけをつらねる点、どちらも大変に正直な内容とあっていい。この詔は、世界帝国の支配層を構成する当時のモンゴルたちにとって、政権の正統性とは、いったいどのように考えられていたかを、われわれに率直・簡明に示してくれる。それは、上は帝室諸王から下は一般平民まで、いわゆる「モンゴル・ウルス」の輿望をになうこと、そして統合の中心にふさわしい血統の貴種であり、かつ「モンゴル・ウルス」を安寧にみちびく力量と経験の持ち主であることの3点である。

大カアンをモンゴル共同体の盟主とする観念は、変わらずに生きつづけている。イスン・テムルは、モンゴル共同体の全成員にむかって、一生懸命に語りかけ説得しようとしているのである。集会において正々堂々と論じわたれる雄弁さがモンゴル大カアンには必要とされたが、その一端がここにかいま見られ

る。大カアンは生得の絶対権力者とはされていない。イスン・テムルが語る調子に、尊大なところは感じられない。うそもまことも含めて、率直さと平明さ、そして抜群のわかりやすさにおいて、この即位の詔は、その文体ばかりでなく、内容でもめずらしい存在である。その意味で、やはり奇妙な即位詔かもしれない。

(2) イスン・テムルの立場

ひるがえって、ではなぜ、このときイスン・テムルでなければならなかったのか。テクシらは、なぜイスン・テムルを擁立しようとしたのか。他に選択肢は本当になかったのか。

鍵は、イスン・テムルの即位詔に示されている。当時の情勢から見て、英宗シディバラを倒したテクシたちにとって、もはや晋王イスン・テムルをえらぶほか仕方がなかった。多くのモンゴルたちがそれなりに妥当だと納得でき、テクシらにとっても都合の悪くないのは、イスン・テムルしか本当にいなかったのである。

暗殺の中核となったテクシら数人は、テムデル与党であった。かれらは、テムデルが陥穽をかけて放逐したコシラをいただくことはできない。コシラがもし大カアンとなれば、旧テムデル与党に報復することは目にみえていた。コシラとその与党は、ダギ政権そのものを憎悪していた。テクシらは、ダギ政権側の人間であった。

コシラが駄目となると、チンキム一門のうち、中央王国系列には、もはや適当な候補はいなかった。チンキムの三子のうち、次子ダルマバラの子で唯一の生きのこりアムガは庶出であった。大カアンとなるには、嫡出の貴種でなければ、「モンゴル・ウルス」各層の賛同をえることはできない。チンキムの第三子の成宗テムルには、徳寿という名の王子がおり、「皇太子」に立てられていたが、早逝していた。そもそも、徳寿の早逝が、成宗他界後の帝国紛争の遠因であり、それが、カイシャンの奪権、さらにアユルバルワダの浮上をもたらした。ただひとり、カイシャンの次子トク・テムルがいたが、かれは英宗シディ

バラとテムデルによって、海南島に流されていた¹⁴⁶⁾ 英宗シディバラは、所詮はダギ-アユルバルワダ系列の人間であり、カイシャン派に対する排斥・否定の姿勢・立場はテムデルと変わらなかった。こういう場合、英宗とテムデルは手を組んだ。英宗政権を反テムデルとばかり決めつけるのが誤解であることの一証でもある。

英宗シディバラの他界によって、クビライ時代のチンキムの遺鉢をつぐ中央王国は、大カアンの位とともに、中心となる適当な人物を失っていたのであった。長年の排斥の結果、貴種はシディバラひとりに先細りしてしまっていたのである。英宗の弟の安王ウドゥス・ブカ（兀都思不花 *Udus Buqa*)は、早世していた。この兄弟は、ともに子がいなかった。

中央王国系列に人がいなければ、クビライ家の嫡出の貴種という点から、西方王国である安西王家か、北方王国である晋王家しかない。ところが、西方の雄である安西王家は、カイシャンの奪権のさい、取り潰されたかたちになっていた。安西王国の第二代当主アーナンダは、はじめ成宗テムルの寡婦となったブルガン・カトンの誘いで彼女と組み、大都の政権をいったん掌握した。しかし、安西王の帝位継承に不満な中央王国系列の宿老・要人たちが、河南の懐孟に事実上で配流されていたアユルバルワダを近隣にいる貴種ということで引きずり出し、アーナンダ-ブルガン政権を転覆させた。そのあと、カイシャンの大進撃がおこるのである（Ⅲにて詳述）。

アーナンダは処刑され、安西王国領は、じつはそっくりアユルバルワダが引きついだ¹⁴⁷⁾ ところが、アユルバルワダは「皇太子」とされたから、ややこしくなった。モンゴル帝国において、チンギス・カンが定めた国家の基本型（左右両翼の6個のウルスなど¹⁴⁸⁾）は、ゆるがすことのできない祖法として尊重された（だから、いくら帝室叛乱があっても、チンギス時代に創設された一族ウルスそのものは、決してほろぼされることはなかった）。ちょうどそれとおなじように、大元ウルスでは「第二の創業者」であるクビライのさだめた国家システムの基本パターンそのものは、犯しがたいものとされた。この場合、安西王家のアーナンダにはオルク・テムル（烏魯帖木兒 *Ürüg Temür*) という嗣

子がいたが、武宗カイシャンは彼の継承を認めず、ただし安西王国という枠組は温存して弟アユルバルワダに授与したのである。

一方、「皇太子」という立場は、クビライ時代のチンキムがそうであったように、実質上、中央王国の主人であることを意味する。「皇太子」が帝位につけるかどうかは、クリルタイ次第、つまり実力と運（現実にはクリルタイを動かせる軍事力が決定する。成宗テムルとカマラの争いも、じつは、テムルの背後に大軍団を握る大將軍バヤン Bayan がいたからである）によるが、少なくとも「皇太子」とされた人物は、現職の大カアンの膝もとで中央政権と多分に機構・人間構成上で重複する部分のある中央王国を握るのである。だから、アユルバルワダが「皇太子」でありながら、安西王国領をひきつぐという事態を字句どおりにうけとると、三大王国のうち、二つまでも彼が握ってしまったことになる。

カイシャン時代のアユルバルワダの立場は、じつはよくわからない点が多い。すでに述べたように、仁宗・英宗期の漢文文献には、共通してそうした微妙なことをあきらかに避ける独特の皮膜がかかっている。ただし、手がかりはひとつある。それは、カイシャンの嫡長子コシラが、アユルバルワダのつぎの「皇太子」として談合されていたことである。つまり、カイシャン後は、コシラが中央王国の主人に予定されていた（ただ、もしそのとおりになったとき、安西王国領は、シディバラカトク・テムルか、はたして誰が相続を予定されていたかは推測の限りでないが）。カイシャンにしてみれば、はじめからコシラを「皇太子」にしたかったところだろう。

おそらく、アユルバルワダの「立太子」のためにカイシャンのもともとの構想は、少し狂ったのである。カイシャン時代の三大王国は、おそらく中央王国の帰属については、いったん棚あげにしたかたちで、その行政職の部分と安西王国領をアユルバルワダが継承し、モンゴリア王国には晋王イスン・テムルがそのままいつづけることとなったのではないか。クビライ時代とくらべ、若干、変型したことになる。

安西王アーナンダの子オルク・テムルは、安西王位の継承、すなわち安西王

家による安西王国の復活を幾度となく嘆願した¹⁴⁹⁾。しかし、いつも却下された。武宗カイシャンは早々に他界したから、オルク・テムルのうらみは仁宗アユルバルワダとその子の英宗シディバラにむけられた。コシラの「叛乱」を演出するため、その与党の中心人物と目された淇陽王アスカンをわざと転出させた陝西行省こそ、旧安西王国の中心をなす部分を担当するものであった。ラシード『集史』によれば、アーナンダ時代の安西王国は15万もの大軍団を擁し、その圧力を気にした成宗テムルが即位後、討滅をおもいたち母のココジン・カトンに諫止されるほどであった¹⁵⁰⁾。安西王家の再興をねがう遺臣や関係者は広汎に存在し、ついにかれらは現政権の転覆をたえずねらうこととなった¹⁵¹⁾。テクシらの策謀に参加した面々のなかで、最高の貴種は、じつはこのオルク・テムルであった¹⁵²⁾。

とはいえ、テクシらにとって、オルク・テムル自身を新帝に擬するのは、いかにも具合がわるかった。純然たる「叛乱者」の印象となってしまう。血統は良いとはいえ、現在はオルク・テムルは帝国全土に知られた反政府勢力の巨頭である。新政権の大義名分は成り立ちがたく、モンゴルたちの賛同も求めがたい。それに、オルク・テムルが帝位につくと、コシラほどではないにしても、旧ダギ政権内の人間であったテクシらにたいして、態度を豹変させないという保証はない。オルク・テムルとしても、当面、英宗シディバラへの復讐と安西王家の再興だけをもとめて、テクシらの計画に参画していたのだろう。その限りにおいて、オルク・テムルの参加は、テクシらに有力な旧安西王国家臣団の参陣を保証していた。

ようするに、晋王イスン・テムルしかいないのである。彼なら、たしかに嫡流中の嫡流で文句のない貴種である。しかも、オルク・テムルのような傷がない。現職の大カアンが「不慮の死」を遂げたあとのなだらかな継承者として、もっとも自然かつ穏当である。至元十三年（1276）十月二十九日うまれの晋王イスン・テムルは¹⁵³⁾ このとき数え47歳。年齢でも申し分ない。他の誰よりも、モンゴル共同体の総意をえやすい人物といえた。くわえて、その即位詔の文面が示すように、父カマラ以来、帝位への野望はあきらかに秘めている。そして、

なによりも、モンゴリアに強大な武力を有している。逆にもし、彼を擁立しないとなると、その軍事力が「叛乱鎮圧」を名目にテクシらにたいして行使されないとは限らない。

こうしたいわば誰にでもわかる当然の計算のほか、テクシらには、さらにいくつかの打算があったのではないか。ひとつは、晋王イスン・テムルの無能・柔弱さである。もし、彼が有能・果断であれば、大徳六年（1302）の晋王継承後も、ひきつづきカイシャン、そして安西王アーナンダがカイドゥ陳営にそなえてモンゴル高原に駐留しつづけることはなかった。肝心のカイドゥ自身は、すでにその前年に他界していたのだから。カイシャン時代にも、太師・淇陽王オチチェルがモンゴリアに駐屯しつづけたのも、カイシャン自身がいとこイスン・テムルの実力を熟知していたからだろう。さらに、晋王家の軍事力をもってすれば、カイシャン他界後の一連のいかがわしい宮廷内紛争に強権を発動して、北から迫ることも可能だったはずである。事実、ダギ政権は、カイシャン他界、コシラ追放、シディバラ即位の節目ごとには、晋王イスン・テムルの懐柔と優遇に努め、その都度、莫大な賜与をおくりつづけている¹⁵⁴⁾ あきらかに、ダギとその周辺は晋王家の介入をおそれていた。しかし、晋王イスン・テムルは、ついに微動だにしなかった。結果として、ダギ時代12年間のかくれた演出家は、晋王イスン・テムルその人であった。

晋王イスン・テムルは、傀儡にむいた人物であった。権威の象徴となりだしていた大カアンにふさわしい人であった。野心家でありながら優柔不断なイスン・テムルは、テクシらの申し出をよろこんでうけ入れた。彼の即位詔には、もちろんテクシらの側からの智恵も入っていると見ていい。

イスン・テムル新政権の功労者となることで大カアン弑虐を実権者へのステップとできるつもりであったテクシらの計算は、見事に適中した。ただし、イスン・テムルは彼らがおもう以上に柔弱であった。自分の新政権が篡奪政権の汚名を着ることになると入智恵されると¹⁵⁵⁾ たちまちふるえあがり、警戒を解いていたテクシら暗殺グループを捕縛・処刑した。このときだけは、果断に強権を発動した。

しかし、彼がプラス・マイナス両面で大カアンにふさわしい要件をそなえていることはテクシらの計算どおりであった。彼の5年半あまりの治世は晋王家の首班であったダウラト・シャー（倒刺沙 *Daulat-sāh*）が実権者となる。大カアンの機関化・シンボル化は一段とすすんだ。イスン・テムル政権時代は、西方の三大ウルスとの交流もさかんで、アルタイ方面のコシラとも融和した。漢族官僚たちも意外なことに、むしろ自由・活発に発言・著述できたようである。¹⁵⁶⁾ 仁宗・英宗期のような、政権側からの「期待」が強制枠とならなかったからである。ただし、帝国変動の芽は、別のかたちで確実に育っていった。キプチャク、アス、カンクリら「常備軍」による新時代の胎動であった。

（なお、注はⅡ・Ⅲと一括掲載する）